

## 社会経済史学の再構成に向けて：ドイツ環境史の可能性(1)

田北, 廣道  
九州大学大学院経済学研究院：国際経済経営部門

<https://doi.org/10.15017/19854>

---

出版情報：経済學研究. 77 (5/6), pp.73-107, 2011-03-31. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# 社会経済史学の再構成に向けて：ドイツ環境史の可能性 (1)<sup>1)</sup>

田 北 廣 道

## はじめに

我が国にも大きな影響を与えたドイツの社会経済史学会は、2004年に雑誌『社会経済史学季報』の創刊100周年を記念して「作業領域、課題、展望」のサブタイトルを付した論文集を刊行した (Schulz, 2004)。それは、中世、近世、近現代に区分された編年史とテーマ別との2部構成となっているが、1960/70年代以降に急成長した分野の一つに、女性史・社会史、企業史とならんで環境史をあげている。H.ブラウンが担当した論考のタイトルは印象的である。「技術史から環境史へ」(Braun, 2004)という表題には、ドイツ環境史において技術史の果たした先導者の役割が、凝集的に表現されている。その点を、ドイツを代表する2人の環境史家であるJ.ラトカウとA.アンデルセンは、それぞれ次のように巧みに表現した。「ドイツにおいて史的な環境研究は、おもに技術史の挿し木(分枝)として成立した」(Radkau, 1997/99, p.479)、「ドイツにおいて史的な環境研究にとって決定的な刺激は、技術史から来ている」(Andersen, 1993, p.690)。もっとも、社会経済史が、技術史に遅れていたわけではない。1981年3月ドイツ技師協会が「歴史における技術と環境」をテーマに掲げて研究集会を開催したのに続いて、その翌月、社会経済史学会も「経済発展とその環境への影響」を共通論題とする大会を組織して、あたかも先陣争いを見るかのようなようである (Troitsch, 1981; Kellenbenz, 1982)。

一方、我が国の社会経済史学会が環境問題を共通論題に最初に取り上げたのは、ドイツに遅れること20年後のことだったが (鬼頭, 2003; ポメラント, 2003; 田北, 2003; 安国, 2002; 柳澤, 2003)、やはり学的始動の遅れをことさら強調することは、控えねばなるまい。森本氏は、1989年論文において西欧中世社会経済史に関する研究の到達状況を正確に踏まえつつ、それぞれ「環境との調和」と「環境破壊」の局面とを強調する所説を、批判的に検討している (森本, 1989)。また、1992年刊行の『社会経済史学会創立60周年記念論集』には、日本の公害史を扱った安藤氏の論考が掲載されているし、2002年の『70周年記念論集』となると環境史を扱った論文4点が所収されている (安藤, 1992; 脇村, 2002; 大月, 2002; 水島, 2002; 上田, 2002)。その大半は、杉原氏の総説から窺えるように「グローバルヒストリー」を意識して書かれており、現代の環境危機に触発されて、環境史学の成立・発展の足跡を簡単に辿る論考を発表した石氏と通底するところがある (杉原, 2002; 石, 1999)。海

---

1) 本論は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「独占形成期ドイツにおける環境闘争：化学工業を例として」(平成22 24 年：課題番号22530341)に基づく研究成果の一部である。

外の研究成果の邦訳と紹介も含めて、主要な関心は、一般的叙述を除けば、森林、自然保全、環境媒体（大気・水・土壌）の汚染、廃棄物処理にあるようだ（ハーゼ，1996；水野，2006；渡辺，2007；マコーミック，1996；赤津，2003；鬼頭，2002；三保，2010）。しかし、ドイツ学界における環境史研究の開拓者の一人、F.J.ブリュッゲマイヤーから「環境史は、過去数年来ドイツ・海外において顕著な飛躍を経験した」（Brüggemeier, 2006, p.47）と、表現されたほどの活況を呈しているとは、少なくとも社会経済史に関する限り、考えづらい。環境の世紀とも呼ばれる21世紀に生きる若手研究者と研究者の卵たちにとって、本論が環境史への関心を少しでもかき立てられればと、願っている。

ところで、本論執筆の直接のきっかけは、社会経済史学会創立80周年論集への寄稿依頼であった。気軽に引き受けてみたものの、後悔することしきりである。一つに、そもそも環境史に関する研究動向の追跡など、筆者の能力を大きく超えている。後述のように、自然科学から人文・社会科学の専門家が参加し、それぞれの専門分野に引きつけながら独自の観点と時代射程から、無限とも言えるほど多様なテーマを取り上げている。したがって、以下の論述は、環境問題を現代と歴史の双方向から検討することを課題に掲げる筆者の関心に沿った、大ざっぱな整理にすぎない（田北，2004）。次に、研究史をいくら整理しても、明確な趨勢は読み取れないことである。筆者は、これまで中・近世西欧社会経済史に関わる幾つかの問題に関係して、研究動向の追跡を試みたことがあるが、そこで検証できたような古典学説の批判と代替案の提示という方向は、見えてこない<sup>2)</sup>。もちろん、研究成果の総合化も模索されてはいるが、後述のように、テーマ・方法とも収斂するというよりは、むしろ拡散している。ただ、環境史研究の活性化を、環境ブームに乗った安易な取り組みと見なすような誤解を避けるために、一言しておきたいことがある。大半の業績は、新たな類型の史料の発掘・分析に裏打ちされ、歴史科学の作法に則って作成されていることである。その意味から環境史は、1960/70年代以降の問題関心・方法の革新という歴史学の大きな潮流内に位置している。以上の意味での拡散傾向に鑑みると、本論は、あくまで一つの切り口を提示したものにすぎない。さらに、『社会経済史学会創立80周年論集』に掲載される論文は、紙数の制約があるため膨大な数の研究文献・論文を挙げる余裕がなく、それを掲げるのも、本論の狙いの一つとなっている。ただ、当初、英米学界の調査も踏まえた論考作成を目指したが、途中で挫折してしまった。この点でも、末尾に掲げた文献一覧は不完全であり、以下に紹介する業績に挙げられた文献目録と注記によって補完すべきであることも、お断りしておく。

最後に、本論の論述手順について簡単に述べておきたい。Iは、ドイツ学界における環境史研究の現状を把握するための作業に当てられる。環境史の学的始動のきっかけに触れつつ、代表的な動向論文から研究の到達点を明らかにする。次いで、『社会史雑誌』に掲載された3本の動向論文を手がかりにして、21世紀初頭までの研究史の歩みを簡単に辿る。最後に、それ以降に発表された業績も視野に収めつつ、ドイツ学界における環境史研究の特質を簡単にまとめる。IIは、具体的な研究成果の紹

2) 中世後期の都市・農村関係に関しては、田北，1985，1986/87，1987b，1995を、ギルド・職人史に関しては、田北，1987，1991を、そしてプロト工業化については、田北，1987a，1996，1997を参照願いたい。

介に当てられる。前半部では、最近興味深い成果が多数寄せられている幾つかの問題領域(時代区分、森林史、農業史、都市史、産業史)を取り上げる。後半部では、筆者が現代環境政策論との対話から導き出し、最近、制度経済学に注目した環境史家にも共有されている「政策主体アプローチ」の可能性を化学工業を例にとって概観する。

## I. 環境史研究の歩みと現状

### (1) 研究活性化の契機と研究の到達状況

ドイツ学界において環境史研究が活性化するに至った、その契機の検討から始めよう。1991年『ヴェストファーレン研究』に動向論文を発表したP.ライディンガーは、研究始動のきっかけと学的特質とについて、次のように簡明に述べている。「歴史科学は、他の精神科学と同じように比較的遅く、1970年代半ばから現代の環境危機に取組み始めたにすぎない。とはいえ、その点で歴史科学が、自然科学や政治学と比べて大きく立ちおくれたわけではない。それらも、1960年代末と1970年代初頭の生態系破壊に関する報告を受けて初めて環境政策的な思考方法と意思決定をつよく示すことで、我々が長く慣れ親しんできた進歩思想を補ってきたに過ぎないからである」(Leidinger, 1991, p.495)。1960年代末以降の環境危機を契機にして急旋回を遂げたこと、これまでの進歩思想に果敢に挑戦したこと、の2点を指摘した。環境危機が広く受け入れられる時期をめぐっては、1970年代と1980年代と立場の相違があるが、環境史を環境運動の申し子とみなす点で広い意見の一致がある。グローバルな環境危機を招いた原因は、酸性雨による森林破壊、化学物質による生物多様性の危機、原発や遺伝子組み換えに代表される先端技術と結びついたリスクなど多様だが、アースデイをはじめ様々な空間レベルで展開される環境運動の隆盛が、史的な環境研究に弾みをつけた (Brüggemeier, 2001, pp.197-198 ; Radkau, 2003, pp.165-167 ; Freytag, 2006, pp.385-386 ; Siemann/Freytag, 2003, pp.9-10 ; Uekötter, 2007, pp.1-2 ; Büschenfeld, 2007, pp.2-3)。したがって、フランスのアナル学派や米国のR.カーソン、C.マーチャント、D.ウースター、W.クロノンなどの先駆者達に若干遅れたとはいえ、19世紀後半以降ドイツの急激な工業化と同じように、短期間でキャッチアップを達成した (Andersen, 1993, pp.673-680)。

以上のように、ドイツの環境史は、1970年代の環境危機・環境運動に触発されてスタートしたが、それから一世代を経た今日、どのような到達状況にあるのだろうか。最近のサーベイ論文のなかで使われている印象的な「見出し語」を紹介しつつ、一瞥してみよう。

まず、1990年代の技術史・環境史を扱った書評論文にあってラトカウは、「狩猟採集段階から集約的な農耕段階に入った」(Radkau, 1997/99, p.489)と述べて、人類史の一大画期をなす新石器革命にたとえている。もっとも、「その集約化が、どの程度進歩を意味しているかは確実でない」(op.cit., p.489)と、厳しい留保を付してはいるが。次いで、第19回国際歴史学会において「環境史の新展開」と題するセッションを組織したブリュッゲマイヤーは、1990年代の研究活性化を踏まえつつ「もはや周縁的ではなく、成熟した学問となった」(Brüggemeier, 2000, p.375)と、学的自立を高らかに宣言

した。多くの論者も、それと重なるような積極的評価を与えているので、代表例を3点紹介しておこう。J.ビュッセンフェルトは、環境史の特集号に当てられた2007年『ヴェストファーレン研究』の巻頭論文において、「幼年期・思春期を経過して大人の仲間入りを果たした」(Büschendorf, 2007, p.1)と、N.フライタークは「学的なアイデンティティ探しのための思春期は、既に過去のものになった」(Freitag, 2006, p.383)と、そしてM.トイカ=ザイトは、「最近、成人に達したばかりである」(Toyka Seid, 2003, p.447)と述べている。1989年にドイツ環境史の開拓者の一人に挙げられているJ.ミークから、「由緒正しき母親である歴史科学の最年少の子」(Mieck, 1989, p.205)と呼ばれた環境史は、一世代にして成人の仲間入りを果たしたのである。

しかし、以上のような所説に異論がないわけではない。その代表者が、『ドイツ史百科事典』の1巻として『19/20世紀環境史』を2007年に上梓したF.ウエケッターである。その序言においてウエケッターは、「環境史が、実際に成年に達したかどうか、疑うにたる十分な理由がある」(Uekötter, 2007, p.IX)と述べ、2つの論拠を挙げている。第1に、米英両学界とは異なり、ドイツでは環境史に関する専門誌が刊行されていないことである。米国では、1976年創設の米国環境史学会が『環境史雑誌』(1997年から「環境史」と改称)を刊行しており、1995年に英国の『環境と歴史』がそれに続いている(Braun, 2004, p.393; Mosley, 2001, p.6)。第2に、環境史を扱った叢書の刊行も、ようやく数年前に始まったに過ぎないことである。その代表例をなす『技術・労働・環境史に関するコトブス研究』と『自然・環境保全の歴史』は、それぞれ1996年と2004年に創刊されている<sup>3)</sup>。このようなウエケッターの主張は、説得力をもっているのだろうか。筆者は、次のように考えたい。

第1の理由に挙げられた専門誌の欠如も、功罪相半ばと解釈できる。「生態学的帝国主義」の提唱者として著名な米国のA.W.クロスビーは、米国における環境史学会の設立と雑誌刊行のもつ否定的側面として、新たな仲間(ギルド)形成と、それに伴う他の歴史関係の学会との交流の減少を挙げている(Crosby, 1995, p.1188)。角度を変えれば、ミニ学会の創設が、歴史科学の裾野の拡大につながらず、逆に「蝸壺型」の視野の狭隘化に導く危険性がある。それと対照的にブラウンは、2004年論文において専門誌の欠如のもつ積極的意義に注意を喚起した(Braun, 2004, p.393)。様々な雑誌・論文集に研究成果が発表されたことが、専門領域を超えて読者の心をとらえ、新たな分野に対する多面的接近を進めるうえで促進的契機となったのである。その見解は、ドイツに根強く残る地方史的伝統の肯定的影響を、別の角度から照射したともいえる。地方史学会のうち、環境史を扱った特集号を組んだり、環境に関わる研究集会を定期的で開催するなど、活発な活動を繰り広げている例を2つ紹介しよう。一方で、『ヴェストファーレン研究』は、1991年ライディングーの手になる動向論文を掲載したのに続いて、2007年には「自然・環境史」と題する特集号を刊行している(Leidinger, 1991; Büschendorf, 2007)。他方で、『ニーダーザクセン地方史年報』も2004年以降ほぼ毎年、「動物」、「都市と周辺地」、「有限な資源」をテーマにした研究集会を開催し、その成果を掲載している<sup>4)</sup>。もちろん

3) 九州大学の図書館に所蔵されている限りで、それぞれの叢書は、末尾の文献一覧に載せているので、Cottbuser Studien と Geschichte des Natur の項目を参照願いたい。

ん、地方史雑誌の全てが、環境問題を取り上げているわけではないが、『社会史雑誌』、『社会経済史季報』、『技術史』、『史学雑誌』など学会誌から地方史雑誌まで幅広い発表機会があったことが、研究の活性化につながったことは、間違いない。

第2の叢書刊行についても、その遅れをことさら強調することは許されまい。フライタークは、「思春期のアイデンティティ探しを過去のもの」と判断する際の積極的証拠として、環境史に関する叢書刊行を挙げている (Freytag, 2006, p.383)。それは、一定の学問的成熟を示す指標であるからに他ならない。筆者は、「木材不足」論争を扱った2003年論文の冒頭において、ドイツ学界における環境史の学的確立を示す「指標束」として次の項目を挙げていたが、さらに叢書刊行が加わったといえる (田北, 2003, p.41 : Braun, 2004, p.394)。一つに、様々な学会 (学問分野) における国際的・学際的な研究集会の開催である (後掲の表1を参照せよ)。次に、ドイツ社会経済史に関する一般的叙述における環境史を扱った独自の章・節の設定である (Mieck, 1993 : Radkau, 1996 : Henning, 1996 : Hahn, 1998)。三番目に、環境史固有の史料集の刊行である (Brüggemeier / Toyka Seid, 1995 : Bayerl / Troitzsch, 1998)。四番目に、大学の歴史学科における環境史講座の開設である。ただ、独自の教職ポストの割り当てなど制度化の遅れが最近指摘されており、この点で幾分割り引いて考える必要があることを、付言しておく (Büschfeld, 2007, p.1)。最後に、環境史の研究方法をめぐるエコシステム論者と人間中心主義者との間で戦わされた、研究の入り口での激しい対立から、補完への歩み寄りである (Brüggemeier, 2001, pp.4622 4623 : 田北, 2004, pp.69 71)。

表1 ドイツ学界における主要な研究集会・研究業績の一覧

- 1981 Troitzsch : ドイツ技師協会 『歴史における技術と環境』
- 1981 Kellenbenz : ドイツ経済社会史学会 『経済発展と環境への影響』
- 1982 Sieferle : 『地下の森 : エネルギー危機と産業革命』
- 1983 Radkau : 「18世紀の木材不足と危機意識」
- 1987 Schramm : 「19 20世紀の史的環境研究と社会史」 (『社会史雑誌』)
- 1988 Pfister を中心とした「歴史的環境研究のための欧州連合」の創設
- 1990 Andersen : 「歴史研究のテーマとしての環境史とその現代的関連」 (『労働博物館』主催)
- 1991 Leidinger : 「史的環境研究から史的生態学へ」 (『ヴェストファーレン研究』誌の動向論文)
- 1990 Brimblecombe / Pfister : 『沈黙のカウントダウン』 (1988年最初の国際的な学際的研究集会)
- 1991 Pohl : ドイツ企業史学会の講演会 『19世紀以降の産業と環境の関係』
- 1992 Abelshauer : 社会政策学会 「科学と政策の問題としての環境にやさしい経済」
- 1992 Brüggemeier / Rommelspacher : 『ルール地方上空の青空』
- 1992 「自然と技術」 (『技術史学会』)

4) 末尾の文献一覧の *Niedersächsisches Jahrbuch* の項目を参照せよ。同学会は、2000年に『人間・自然・技術』 (Hauptmeier, 2000) と題する論文集を刊行している。雑誌『旧都市』も、「河岸の都市」と題する特集号において環境と関係する論考を掲載している (Gebessler 2004 : Konold 2004)。

- 1993 Mieck : 「環境としての空間」 『1650 1850年欧州経済・社会』 の1節
- 1994 Abelshauser : 『環境史。歴史的展望からの環境に優しい経済』 (「歴史と社会」学会)
- 1995 Brüggemeier / Toyka Seid : 『産業と自然。19世紀環境史読本』 (史料集)
- 1996 Radkau : 「技術と環境」、Ambrosius 『近代経済史』 の1章
- 1996 Henning : 『ドイツ経済社会史便覧』 (「工業化の第一局面」で環境汚染に言及)
- 1996 Brüggemeier : 『無限の海、大気。19世紀の大気汚染、工業化及び危機論議』
- 1997 Schott 『欧州におけるエネルギーと都市』 (96年第3回国際都市史会議)
- 1997 Andersen : 『社会史雑誌』における研究動向論文
- 1997/99 Radkau : 「技術史と環境史」 (『科学と教育における歴史』誌の動向論文)
- 1998 Hahn : 『産業革命 (ドイツ史百科事典49)』 「環境史と進歩パラダイムへの批判」 の1節
- 1998 Bayerl / Troitzsch : 『古代から現代に至る環境史関係の史料集』
- 2000 Bernhardt : 『19 20世紀欧州都市における環境問題』 (98年第4回国際都市史会議)
- 2000 Brüggemeier : 『環境史における新展開』 第19回国際歴史学会の個別テーマ
- 2000 Radkau : 『自然と暴力』 (エコシステム論者と構成主義者の方法的和解)
- 2001 社会経済史学会 (第70回大会) 共通論題「環境経済史への挑戦：森林・開発・市場」\*
- 2001 Ditt / Gudermann / Rüsse : 『農業近代化と生態系への影響』 (農業史における環境問題)
- 2002 社会経済史学会編 『社会経済史学の課題と展望』 (第2編「環境史からの接近」)\*
- 2003 Siemann : 『環境史：課題と展望』 (2002年ミュンヘン大学夏期セミナー)
- 2003 Brüggemeier : 『環境史と環境運動の歴史』 (『社会史雑誌』の特集号)
- 2003 Toyka Seid : 『社会史雑誌』における環境史の研究動向論文 (1987 : 1997)
- 2004 Schultz : 『社会経済史季報100周年記念号』 (「技術史から環境史」へ)
- 2005 Brüggemeier / Engels : 『1945年以降の自然・環境保全』
- 2006 Freytag : 「ドイツ環境史：ドイツにおける環境史」 (『史学雑誌』の動向論文)
- 2007 Büschenfeld : 「ヴェストファーレンにおける自然・環境史」 (『ヴェストファーレン研究特集号』)
- 2007 Uekötter : 『19 20世紀環境史』 (ドイツ史百科事典第81巻)

(注) \* は日本、下線は学会としての取り組み

[典拠] 筆者が作成

ただ、環境史の学的成熟度を、どの程度まで評価するかは、必ずしも容易ではない。2000年の国際歴史会議では学的自立化を宣言したブリュッゲマイヤーは、2005年のJ.I.エンゲルスとの共同論文では、幾分トーンダウンしている。「まだ、若い研究分野だが、子供時代は終えた」(Brüggemeier / Engels, 2005, p.10)。その理由は、環境史が歴史学に与える衝撃の点で、当初考えられたほどの成果を挙げていないからである。すなわち、「(環境史の対象である)人間・自然関係を、将来にわたり、歴史叙述の一つのパラダイムにまで高めるという希望は、達成できていない」(op.cit., p.10)。同じ指摘は、形こそ違え、他の論考からも読み取れる。ブリュッゲマイヤーは、「環境史と環境運動の歴

史」をテーマに掲げた2003年『社会史雑誌』の特集号の巻頭論文において、現代史・同時代史に関する一般的叙述が環境史に示す冷淡な姿勢に苦言を呈している (Brüggemeier, 2003, pp.1-2)。W.ジーマンとフライターグは、2003年の共同論文において環境を「政治・支配、経済、文化」と並ぶ歴史科学の基本範疇と捉える所説を提示したが、そこに至る道のりは、まだ遠いのである (Siemann/Freytag, 2003, pp.25-26)。

## (2) 1970年代以降の環境史研究の歩み

1970年代以降の環境史研究の歩みについては、これまで色々な機会に論じてきた (田北, 2000, 2004, 2010)。この場では、およそ10年刻みの4時期の研究趨勢を簡潔にまとめるにとどめ、『社会史雑誌』に掲載された3本の動向論文 (1987, 1993, 2003) を主な手がかりにして、学的発展の足跡を簡単に振り返っておこう。

第一期の1970年代は、先行する米国学会の研究成果の紹介などを通じて環境史が始動した「創生期」に当たる。ただ、19世紀後半から20世紀交のロマン主義的郷土・自然保全運動などとは一線を画し、定量化・地図化に代表される新たな手法が採用されるようになった点で特徴的である。第二期の1980年代は、ベルン大学のC.ピスターによる欧州レベルの環境史学会の創設と「ニュースレター」の刊行に象徴されるように、学会組織の整備と学際的研究集会の頻繁な開催とによって特徴づけられる。ただ、自然科学と精神・社会科学の「二文化問題」と術語の違いもあって、意見交換の難しさと「成果の玉石混淆」(Troitzsch, 1988, p.89) を浮き彫りにすることになった。第三期の1990年代は、既述の指標束の大半が出そろった学的確立期に当たる。「経済成長・技術進歩」概念に囚われずに経済社会の歩みを辿るために、環境問題をそれぞれの時代状況のなかに的確に位置づけて考察する方向が鮮明となってきた。第四期の21世紀は、初期の方法論争は後景に退き、「人間・自然の交互関係」を対象に据えた研究が、一段と活性化した。ただ、研究手法と研究対象は収斂に向かうのではなく、むしろ拡散傾向にさえある。逆に、この事情が、環境史の独自性をどのように継承しつつ、どのような手法で取り組み、どのような方向を目指すのか、歴史家各人の腕の振るいどころとなっている。

次に、『社会史雑誌』掲載のサーベイ論文3点を軸にし、最近の動向論文によって補完しつつ研究史の歩みを概観しよう。その際に一方の柱となるのが、H.W.ハーンから「ドイツにおける環境史研究の開拓者」に挙げられた4名の歴史家、ミーク、ラトカウ、ブリュッゲマイアー、R.P.ジューフェーレの業績である (Hahn, 1998, p.119)。もう一方の柱が、第二世代の研究者を含めて最近発表された主要な動向論文である (Siemann/Freytag, 2003; Braun, 2004; Brüggemeier/Engels, 2005; Freytag, 2006; Büschfeld, 2007; Uekötter, 2007)。

### (2) - 1 1987年のシュラム論文

E.シュラムの手になる1987年論文、「19/20世紀史的環境研究と社会史」は、その論題から窺えるように、環境史の苦難に満ちた門出を示唆している (Schramm, 1987)。その導入部の冒頭に置かれた文章が、その点をつよく印象づけている。「10年ばかり前まで歴史科学・社会科学において、いわ



ゆる生態系に関連する問題は、脇役として扱われてきたに過ぎない。確かに、それ以前の歴史学的文献にも、(今日) 問題となっているような、自然とのつき合いの歴史を扱った事例は散見されるが、いずれも、きわめて狭い史料基盤に立脚している。さらに、理論的な処理は、たいがい、比較的系統性のない仕方で行われてしまっている」(op.cit., p.439)。理論・実証とも、手薄な蓄積から出発せざるを得なかったのである。

米国に起源をもつ「人間・自然関係の集中的な考察」は、当初、必ずしも適切に受け入れられたわけではない。H.モテックら旧東ドイツの業績に象徴されるように、史料基盤も脆弱なまま、資本主義的關係の縮図として、牽強付会的と呼べるような仕方一般化がはかられたからだ (op.cit., pp.439-440)。それに転機をもたらしたのが、1978年ハンブルク大学のトロイチュの組織した「18世紀ドイツの製造業と技術」と題する研究プロジェクトだった。新たな類型の史料も発掘しつつ、歴史的な資源不足に関する成果が提示されて、後の「木材不足」論争の出発点となった。その後、1981年にドイツ技師協会と社会経済史学会とが相次ぎ環境をテーマに掲げた研究集会を開催したが、他の学問分野との意見交換に満足してしまって、環境史の学問的發展に直接繋がることはなかった (op.cit., p.441)。したがって、労働運動・産業衛生史など生産部面での環境問題を扱った業績を除けば、この時期、19世紀以降の「実質的な人間・自然関係」に関係する研究は少数に留まる。しかも、取り上げられるテーマも、偏っていた。すなわち、同時代の高い環境政策的関心を反映するかのように、環境媒体の汚染が主流となった。ただ、大半の業績は、史料・文献処理も不十分であり、研究水準は高くなかった。次にみるアンデルセンの1993年論文と違って、金属精錬や化学工業など産業部門別の環境汚染・環境闘争を扱った業績は、皆無に等しかった。

したがって、シュラムの書評は、一般的に批判的で悲観的なトーンに貫かれており、社会史の観点から環境史を系統的に考察する必要性が、くりかえし強調されている。また、今後の展望についても、当時の研究支援体制を考慮するとき、飛躍的發展の見通しは暗いと結ばれている。ちなみに、T.アルノルトの1987年著書も、その冒頭で「我々の環境が、独自の過去・歴史をもっており、研究に値するという事は、決して自明ではない」(Arnold, 1987, p.3) と述べて、将来の研究活性化に懐疑的姿勢を示していた。

ところで、1980年代後半の研究の到達状況を問題としているとはいえ、ドイツ環境史の開拓者の一人、ミークの1989年論文は、論調を大きく異にしている (Mieck, 1989)。冒頭では、環境や環境汚染をテーマに掲げた業績数が、方法的な多様化の中で増加していることを指摘し、研究文献・論文の一覧作成作業の遅れのせいで、研究史の回顧が難しいと、「うれしい悲鳴」も聞こえてくる。それと並んでミークが強調した重要な論点は、新たな類型の史料の発掘と、それを踏まえた新たな視点からの問題提起である。「ウンター・デア・リンデン通りは、以前は今日よりはるかに美しかった。木々は、夏の日差しの中で、目にいたいほどの緑をたたえていた。(今では) 地下の配管から漏れ出るガスが、木々の根を傷めてしまっている」(op.cit., p.206)。19世紀後半に一地方史家が、19世紀前半の状況を振り返った証言を紹介しつつ、都市インフラが植物に与える影響と絡めて、「近代化の光と影」を浮き彫りにしている。なお、研究動向の追究は、環境意識、旧東ドイツ学界の状況、環境破壊の連続と

断絶（大気・水質汚染、エネルギー転換、環境保全立法、上下水道）、学会の報告集、個別論文、学会誌の6項目に分けて行われている。シュラムの悲観論と併せて考慮するとき、1980年代まで環境史は、史料基盤の拡充を通じて「近づく孵化」を待つ胚胎期にあったといえよう。

## (2) - 2 1993年アンデルセン論文

シュラム論文から6年後に発表されたアンデルセン論文となると、雰囲気は一変する（Andersen, 1993）。表1に挙げたように、1990年ハンブルクの労働博物館主催の研究集会を皮切りに、企業史学会、技術史学会が矢継ぎ早に「環境」をテーマに掲げた学会を組織し、またパーゼル大学において環境史に関する連続講義も開講された。そのような動きに鑑みてアンデルセンは、「歴史学にあって女性史が、独自の地位を獲得するまで苦闘したのと同じ状況にある」（op.cit., p.673）と述べ、社会経済史季報刊行100周年記念号の緒言を担当したシュルツと同じように、女性史を引き合いに出しつつ、環境史研究の活性化を強調した（Schulz, 2004）。シュラム論文掲載以降に発表された環境史関係の業績数は急増して、書評の対象を「産業主義の時代を扱った業績」（Andersen, 1993, p.684）に、限定せざるをえないほどだった。紹介された業績は、論文集11点と文献20点だが、後者に限り成果の一部を紹介すれば、次の通りである。

冒頭で取り上げられているのは、C.ピスターによるスイスの歴史的な気候変動に関する1988年著書である。日本語訳も出版されているラ・デュリの業績に触発された業績として、農業生産と人口動態の関連を考察した内容となっている（ラ・デュリ, 2000）。ライディンガーの手になる1991年の動向論文では対象とされなかったが（Leidinger, 1991）、自然災害と並んで最近関心を集めてきた分野に属する（Uekötter, 2007, pp.84-88）。環境史に不可欠な長期的視野の必要性を強調する狙いから最初に挙げられているが、環境史家による歴史気候学の成果に対する評価は、定まっていない。J.マクニールは、「20世紀世界の環境史」と副題を付した2000年の著書において、その成果を積極的に評価しつつ、20世紀の人口急増に導いた「幸運」の一つを小氷期の終結に求めている（McNeill, 2000, pp.16-17）。それと対照的にラトカウは、人間の多様な対応力を挙げて社会経済・人口的構造やその発展の趨勢に対して与えた影響を、どの程度一般化できるのか、懐疑的な姿勢を示している（Radkau, 2003, p.183）。

技術史の分野の画期的業績には、ラトカウの1989年著書が挙げられ、「技術が社会・生態系に与える影響の評価を試みた、ドイツ最初の技術史的な概観」（Andersen, 1993, p.690）と、第一級の賛辞が贈られている。既述のように、技術史はドイツ環境史研究の先導役を果たしたので、ラトカウの1997/99年書評論文から技術史の研究状況に関する叙述で補完しながら、アンデルセンの所見を紹介しよう。まず、技術史における研究姿勢の根本的変化がある。「歴史を素材にして、常々言われてきた技術進歩の必然性を論証することを、自明の課題と考える」（op.cit., p.691）前提からの脱却がある。その背景には、技術史研究における技師協会との結びつき、換言すれば産学連携と実践指向の弛緩があり、それが「これまでの技術進歩の信念からの離脱」（Radkau, 1997/99, p.481）を進めることになった。それにつれて、研究重心も技術革新そのものから革新の普及・拡散、技術と関連した工

エネルギー・物質流の追究、技術史・医療史の橋渡しへと移動してきている。もっとも、ドイツで刊行されている技術史関係の叢書に、それが十分に反映されているとは言いがたい (op.cit., pp.482-489)。アンデルセンは、1993年論文に「環境史：進歩からの訣別」(Andersen, 1993a)と挑発的な論題を付したが、「進歩に関する楽観主義を技術・物的に置き換えた(進歩主義)」(Andersen, 1993, p.691)こそが、1970年代以降に活発化した環境運動の批判のターゲットに他ならなかったからである。最近、P.クッパーが提唱する「1970年代診断」論の基礎にも、そのようなポスト・モダンへの思潮の変化があることを、付言しておきたい (Kupper, 2003; Hünemörder, 2005)。

それに続いて、科学者のコミュニティが紡ぎ出した「技術進歩」と関連して、H.L.ディーネルの著書、『自然に対する支配：1871-1914年ドイツ技術者の自然観』(Dienel, 1992)が取り上げられている。この著書は、工業化の急激な進展につれ1880年頃顕在化してきた景観の変容、それに対抗して組織された自然・郷土保全運動と関連づけて、産業技術的知識人としての「技術者」を取り上げ、技術進歩と「自然の支配」の旗振り人とみなす所説を再検討している。ディーネルによれば、技術者は他の自然科学者以上に専門分野に付随するリスクを十分意識して、責任ある行動を取っている。ただ、アンデルセンの書評は、手厳しい。科学者にエコ意識が欠けていたとまでは言えないが、技術計画を左右するほどの自然保全意識があったとは、論証できていない (Andersen, 1993, pp.691-692)。同じ指摘は、ウケッターの書評からも看取できるが、技術者の意識追究のために企業カタログ、営業用パンフレット、伝記、講演録、旅行記など多様な類型を多数駆使した点は、高く評価されている (Uekötter, 2007, p.50)。

次いで、ラトカウから「19世紀前半の初期的段階から、環境の観点からして化学工業が、最も不快な産業部門であることは知られていた」(Radkau, 1997/99, p.368)と、環境汚染の元凶の一つにも挙げられた化学工業に関する業績が、4点取り上げられている。アンデルセン自身、寡占的な大企業にまで成長したBASFを扱った重厚な業績を発表しているだけに、書評にも力がこもっている (Andersen, 1996)。一つは、BASFの経営陣の一人、W.テルティクによる社史だが、ガス・廃水排出の問題に関する言及はまったくなく、憤りに満ちた内容になっている。残りの2点は、ベルリンの化学者、K.O.ヘンゼリンクの1990、1992年の著書である。副産物利用を繰り返しつつ化学工業が発展してきた歴史をはじめ、門外漢にわかりやすく解説されていると、好意的な評価が与えられている。ただ、汚染の原因が原材料・廃棄物から製品に重心移動し、それに伴い被害の範囲が生産現場とその周辺から広域化する過程が、等閑視されていると、注文が出ている (Andersen, 2000)。最後に、アンデルセンとG.シュペルバークの共編著の『青色の奇跡：合成染料史に寄せて』が、挙げられている (Andersen/Spelsberg, 1990)。筆者は、アルノルトとアンデルセンの論文から環境闘争を考える上で多くの啓発を受けたが、ラトカウの書評は辛口である (Radkau, 1997/99, p.368)。化学工業を対象にして、環境保全と労働者保護の切り口から批判的検討を加えた点は高く評価するが、既刊の二次文献に大きく依存すること、そして現代の視点に囚われた評価に終わっていること、の2点が問題とされている。

女性史と技術・環境史とを結びつけた業績として、B.オルラントの1991年『肌着洗濯人』が紹介さ

れている。18世紀以降の性別分業の発展と洗濯労働による生態系危機の相互関係が考察されている (Andersen, 1993, p.693)。米国の歴史家 C.マーチャントは、機械論的世界像の形成と自然・女性の抑圧過程を重層的に考察しているが、ドイツではあまり多産ではないようだ。ウェケッターに従えば、G.バイエールの1994年論文が例外をなしている (Bayerl, 1994)。ただ、バイエールの提唱する「18世紀のうちに進展した自然の資源化 (効用化)」に関する所説を、男性の思考様式に基づくものと捉えた上で、18世紀以前の自然観は不問に付されたままで、議論が一人歩きしていると指摘している<sup>5)</sup> (Uekötter, 2007, p.46)。

森林・林業史に関しては、4点紹介されている。そのうち2点は、新たな環境史の成果を摂取しないまま19世紀の研究文献を復刻したものであり、アンデルセンは厳しい書評を寄せている。残り2点は、いわゆる「木材不足」論争に啓発された林業研究だが、これは都市公衆衛生関係の業績ともども、別途に扱うことにする。

環境媒体の汚染を取り上げた業績は、2点紹介されている。アーノルトの1987年の著書は、河川利用をめぐる漂白業者・染料業者や化学企業と市当局・市民の間の利害対立を描写している<sup>6)</sup> (Arnold, 1987)。もう一点は、ブリュッゲマイヤーと T.ロンメルスパッハーの共著『ルール上空の青空』である (Brüggemeier/Rommelspacher, 1992)。1961年連邦議会選挙に際し W.ブランドが口にしたスローガンを論題に掲げた著書であり (Brüggemeier, 1988)、筆者も環境史を勉強し始めた頃、巻末に史料が添付されていることも手伝って大きな啓発を受けた。しかし、アンデルセンの書評は、批判的である。環境媒体の汚染に焦点を絞ったアプローチや政治的な節目に即した時代区分に、鋭い批判が浴びせられている。産業汚染に視野が限定されてしまい、自動車の排気ガスや第二次大戦後の消費社会の普及と並行した製品 (殺虫剤・化学肥料・合成洗剤など) 汚染の拡大が不問に付されているという (Andersen, 1993, pp.699-700)。時代区分の基準としては、環境媒体ではなく、人間・技術・環境を結ぶ要素である物質に着目するラトカウの所説が対置されている (Radkau, 1990, pp.350-357)。いちいち、もっともだが、この時代区分をめぐる論争は、後述のように、先行する歴史科学の研究成果とすり合わせながら学問的確立をはかってきた環境史の「産みの苦しみ」の痕跡を色濃くとどめているようだ。批判は容易だが、専門家以外の広範な読者を意識する限り、伝統的時代区分からの訣別は、なかなか難しいのである。

最後に、アンデルセン論文の2年前に刊行されたライディンガーの動向論文を一瞥しておこう (Leidinger, 1991)。それは、この論文が1970年代の学的始動期まで遡及しつつ行われた研究史を総まくりの位置を占めているとともに、ドイツ環境史の初期段階を特徴づける方法論争の一方の代表者 (エコシステム論者) だからでもある。ただ、以前に研究の歩みを辿る際に、この論文を下敷きにしたことがあるので、いくつかの特質を再確認するとどめる (田北, 2000)。第1に、1970年代末以降の主要な学会の対応と環境をテーマに掲げた論文集を考察する文脈で、「テーマの多様さは、環境

5) バイエールの所説の概要については別の機会に紹介しているので、参照願いたい (田北, 2003, pp.47-48)。

6) イエガー染料会社をめぐる環境闘争との関連では、田北, 2008, pp.53-54を参照せよ。

史のもつ射程の長さを、そして学際的指向は新たな下位学問の形成を示唆している」(op.cit., p.500)と述べて、歴史科学の新分野形成と、その奥行きの高さを強調している。第2に、1980年代前半まで考古学に比べて学際的な環境研究は遅れていたが、生態学的視点からの対話の進展につれ大きく変化したと理解されている。第3に、トロイチュ、ジーフェーレ、K.M.マイヤー・アビヒラの業績を引き合いに出して、人間中心主義的な世界像に代わり、「自然との和解」(op.cit., p.504)を鍵概念にした史的生態学の構築を目指す姿勢を、明らかにしている。それを意識したわけではなからうが、最近動物・鳥類保護を扱った業績が、発表されるようになったことを指摘しておきたい(Uekötter, 2007, pp.72-73)。第4に、論文集と個別研究に関する包括的な書評が寄せられているが、ライディンガーの専門分野と関連して環境教育に関する業績に言及されていることに触れておきたい(Leidinger, 1991, p.508)。

方法的多様化と学際的協力のもとで研究が急旋回して、書評論文も対象時代を狭く限定せざるを得ない状況が現出した。

## (2) - 3 2003年トイカ = ザイト論文

その表題、「歴史における人間と環境：環境史の生産的な自己発見過程から生まれた新しいこと」(Toyka Seid, 2003)は、意味深長である。それが意味するところを考えながら、内容を紹介していこう。

まず、「生産的」は、アンデルセン論文発表後も継続する活発な研究活動を示唆している。その到達点が、「最近、成人に達したばかりである」(op.cit., p.447)という表現となる。しかし、環境史の発展は、決して線形的に進んだわけではない。世紀転換期の経済不況を反映するかのようになり、エコ問題への関心も一段落し、研究業績の発表数も頭打ちとなってきた。そのような消極的評価を生んだ一因は、大学における環境史の制度化の遅れにあるようだが (op.cit., p.423)、いささか誇張を含んでいると言わざるを得ない。この点は、既述のような学的成熟を示す「指標束」と環境史家の所説を考慮するとき、ただちに明らかとなる。とはいえ、この学歩みの紆余曲折こそが、以下の2つの趨勢と関連づけて説明される「自己発見過程」ということになる。

第1に、ドイツの環境史研究の初期段階を特徴付けたエコシステム論者と人間中心主義者の方法的対立の相対化である。もちろん、対立が霧散したわけではないが、少なくとも、入り口での論争に終始する姿勢は、「(研究を) 繁栄に導くというよりは、むしろ苦しめる」(op.cit., p.424)との認識から、後退してきた。それを踏まえて、「人間・自然の複合的な交互関係」を研究対象に据えて、多角的な接近が試みられるようになった。ブリュッゲマイヤーは、『国際的な社会科学・行動科学百科事典』のなかで、「どのように自然が人間に影響を与えるのか、どのように人間が自然に干渉するのか、どのように人間・自然が相互作用を及ぼし合うのか (人間の行動によって惹起されないような自然の変化を含めて)」(Brüggemeier, 2001, p.4621)と定式化した。そのような研究対象と研究方法の開放性が、研究を新たな局面に押し上げるというのである。この開放性は、ブリュッゲマイヤーとエンゲルスから「強烈な方法的宣言や学派形成に進まない」(Brüggemeier / Engels, 2005, p.10)と集約され

たように、ドイツ学界の大きな特質をなすことを明記しておきたい。

第2に、対象時代の重点が第二次世界大戦後にシフトしたことである。今日の環境問題の史的な起点として工業化・都市化は、あいかわらず重要なテーマを構成しているが、後述の「1950年代症候群」や「1970時代診断」に象徴されるように、エコ時代と直結するテーマが登場した。この点は、トイカ=ザイト論文が掲載されている『社会史雑誌』の特集号「環境史と環境運動の歴史」の所収論文をみると、明らかになる。このシフトのなかにも、現代の環境運動と環境危機に牽引されて始動した環境史の学的自立化が投影されていることを確認しておきたい。当初、選好された環境媒体の汚染、森林破壊やエコ運動の史的起源に関わる問題からの解放を意味するからである (Freytag, 2006, pp.385-386; Uekötter, 2007, p.2; Büschendorf, 2007, p.2)。なお、この過程が「第二世代の環境史家」(Freytag, 2006, p.396)の登場と並進していたことを、忘れてはならない。

ところで、トイカ=ザイトの論文は、研究集会・論文集と「環境史の総合的叙述の試み」と2部から構成されているが、それに沿って簡単に見ていこう。

まず、学会による取り組みのうち興味を惹くのは、W.アーベルスハウザー編の論文集『環境史：歴史的展望からの環境に優しい経済』(Abelshausen, 1992)である。『歴史と社会』の特別号として編まれたこの論文集は、社会史的な環境史に分類されて、1987年の論文集『打ち負かされた自然』<sup>7)</sup>(Brüggemeier/Rommelspacher, 1989)の系譜上に位置づけられている。ただ、筆者が目じりたいのは、「環境に優しい経済」の構築にとって環境史のもつ可能性に関するアーベルスハウザーの見解である。「経験(実証)的な歴史研究は、モデルを使った理論的作業とは違って、次のような制度的・進化的見方を推奨してきた。すなわち、経済と社会における制度、権力、法のもつ重要性を強調し、同時にそれを超えて、人間社会の中期的な安定化と長期的な存続可能性にとって社会的価値の重要性を強調する立場が、それに当たる」(op.cit., p.10)。2つの論点がある。一つは、平板な新古典派経済学のモデル分析と違って、市場と並び法制度を重要視する点であり、いわば制度経済学との対話の方向である。もう一方は、人間行動の規定要因を短期的な効用最大化に限定することなく、中長期的な視点から「安定」と「持続可能性」を考慮することである<sup>8)</sup>。ただ、最近新古典派の一部に、「ただ乗りの」な自然・環境の長期利用の限界を銘記しつつ、持続可能な経済発展や「環境に公正な発展」を中核に据える学派も登場していることを想起するとき (Braun, 2004, pp.395-397)、修正が必要だと考えられる。その点を割り引く限り、筆者はアーベルハウザーの立場を継承したい。第二世代の環境史のリーダーであるウェッカーも、D.ノースの制度経済学を引き合いに出して、方法的基礎に据えているように、社会経済史学の再構成に大きな可能性をもつと考えるからである (Uekötter, 2003, p.16)。

次に、環境史における時代区分に関する諸業績が取り上げられているが、これはIIで扱うので、

7) その邦訳、平井旭訳、2007、『ドイツ環境史：19世紀と20世紀における自然と人間の共生の歴史』リーベル出版、は、多くの箇所の意味不明の文章が長々と続くなど、内容を的確に理解して訳出されているとは考えられず、科学研究には利用できないことを明記しておく。

8) ブリュッグマイヤーは、近代林業に由来する「持続可能性」概念を、無批判に環境史の道具立てに利用することに批判的である (Brüggemeier, 2001, pp.206-209; 2001, p.4626)。

「最近の環境史研究の一つの重点」(Toyka Seid, 2003, p.427) と呼ばれている、工業化・都市化に関わる業績をみてみよう。

一つの分野は、歴史的なエネルギー供給に関係している (op.cit., p.427)。最近の再生可能エネルギーへの関心の高まりを反映するかのよう、M.ハイマン著の『風力エネルギー利用の歴史 (1890-1990)』が紹介されている (Radkau, 1997/99, p.358)。それ以外では、いわゆる「木材不足」論争に関わる森林・林業史に関わる I.シェーファアの著書と、J.ホーエンゼーの手になる石油危機に係る文献が挙げられている。この問題に関しては、ウエケッターの『19/20世紀環境史』第2部4章「エネルギー危機と資源問題」が、成長の限界論、原子力問題、「1950年代症候群」、再生可能エネルギー、エネルギーシステムの世界史まで論じており、はるかに包括的な情報を提供している (Uekötter, 2007, pp.56-62)。二番目の分野は、環境媒体の汚染を扱った業績であり、以下に列記するようにきわめて多産である。「19世紀の大気汚染、工業化およびリスク議論」とサブタイトルが付されたブリュッゲマイヤーの教授資格論文である『無限の海、大気』(Brüggemeier, 1996)。第一次世界大戦までの「長期の19世紀」(Kocka, 2004) ヴェストファーレンにおける産業による環境汚染を論じた、U.ギルハウスの『産業の悩みの種』(Gilhaus, 1995)。米国流の「新技術のもつ環境影響に関する歴史的評価」概念を2つの産業部門に適用した、アンデルセンの教授資格論文、『1850-1933年金属冶金業と化学工業を例とした史的な技術の影響評価』(Andersen, 1996)。第2帝政期の産業による水質汚染を包括的に扱った、ビュッセンフェルトの『河川と排水口』(Büschefeld, 1997)。イギリス産業革命の中心地マンチェスターを環境史の視点から考察した、S.モスレイの『世界の煙突：ヴィクトリア・エドワード期マンチェスターの煤煙汚染の歴史』(Mosley, 2001)。それらの業績の大半に関してラトカウは、超辛口の書評を寄せてはいるが (Radkau, 1997/99, pp.371-381)、「ドイツ環境史にあって最良の研究領域」(Uekötter, 2007, p.67) として米国学界をしのぐ成果を生み出してきたことを看過してはならない (Stine/Tarr, 1998, pp.7-8)。その意味からウエケッターも、『19/20世紀環境史』のなかに「環境汚染と都市公衆衛生」の1章を設けて詳細に論じているので、後半部で立ち返ることにする。

最後に取り上げられているのが、自然・郷土保全を扱った3業績である (Toyka Seid, 2003, pp.433-434)。A.クナウトの著書『自然に帰れ』は、第2帝政期の市民的な産業文明批判と連動した郷土保全運動を制度・理念史的観点から考察し、人間・自然関係の密接な連関として地域アイデンティティ形成を論じている。G.レンツの1999年刊行の著書『景観の喪失経験：19世紀中葉以降中部ドイツ産業地域における空間・環境の形成に寄せて』は、ヘッセン北部の褐炭鉱山の開発に伴う農業地域の急激な変化を環境媒体と人間生活の変化を通じて描写している。H.ロリンズの著書『郷土に対する緑の視線』は、初期郷土保全運動の「自然ロマン主義」という後ろ向きの特質を強調する所説を俎上に載せる。教養市民を中心とした運動ながら、社会的・生態系的調和を標榜しつつ反資本主義的理念に彩られていた。ワイマール期に右傾化し、ナチス期まで継続すると理解されているが、時代状況への位置づけを失敗していると、トイカ=ザイトの書評は手厳しい。

この自然・郷土保全に関する研究は、環境史の学的始動の契機が現代の環境危機・運動にあった事

情とも関連して盛んである。ウエケッターの著書『19/20世紀環境史』は、「自然保全と景観保護：エコ時代以前の社会運動」、「1945年以降の環境運動」と題する2章を当てて、研究史の総括を試みている (Uekötter, 2007, pp.68-79)。ドイツにおける都市化・工業化の急進行と並行して「自然保全運動の形成期として最も研究が集中的に行われている」(op.cit., p.69)と、表現される第2帝政期、その自然保全運動の性格を「ナチスは緑か」との視点から批判的に検討するナチス期、第二次大戦後のエコ運動の先駆け期などに時代区分しつつ、動物・鳥類保護や新たな社会運動との関連も踏まえて網羅的に扱われている (Radkau/Uekötter, 2004)。

トイカ＝ザイト論文の後半では、環境史に関する総合化の試みが紹介されている。ブリュッゲマイアーの1998年の著書『チェルノブイリ：生態学的挑戦』は、19世紀以降ドイツにおける環境破壊と法制的対処・保全運動の展開の足跡を追究している (Brüggemeier, 1998)。原発事故の叙述は今日のリスク社会に注意を向けるために、いくぶん取って付けたように置かれた感を免れないが、第二帝政期、ワイマール期、ナチス期、第二次世界大戦後と時代状況に環境問題を位置づけながら考察した業績として、最初に紹介されている。ラトカウの2000年の著書『自然と暴力』は、地理学・植物学など隣接分野の成果に大きく依拠しながら、自然の発達と長期持続を論じた業績としてあげられている (Radkau, 2000)。それ以外にブリュッゲマイアーの2000年論文「国際的環境史」と、R.H.グローヴの『緑の帝国主義』と英国・スイスの国民国家に関する成果が紹介されている (Brüggemeier, 2000a)。

ただ、クロスビーの著書を含め「エコ帝国主義」を扱った業績は、必ずしも積極的に評価されているわけではない (クロスビー, 1998)。代表例を3つ紹介しよう。ラトカウは、1997/99年書評論文においてクロスビーの著書を取り上げ、生物学的影響の双方向性と衝撃の肯定的結果にも注意を喚起しつつ、批判的立場を明らかにした (Radkau, 1997/99, pp.493-494)。この点、ウエケッターもかわらない。特に、外来作物 (トウモロコシ) 導入の農業・生態系への衝撃を取り上げた2007年論文において、クロスビーの所説が既に広範な批判にさらされて、一般化は危険であると結論づけている (Uekötter, 2007, p.83; 2007a, p.151)。ブリュッゲマイアーは、2001年の「国際的環境史」論文において「生態学と欧州の膨張」の節を設けて、エコ帝国主義関係の業績を包括的に扱っている (Brüggemeier, 2000a, pp.378-381)。現地社会における人間・自然関係の考察なしに大胆な結論を導き出す手法に、懐疑的姿勢を示している。それ以外に、国民国家を対象にした業績が紹介されているが、それは環境史の分析単位に関わるので、すぐ下で立ち返る。最後に国際都市史学会が取り上げるテーマと関連して、環境史への関心の高まりが指摘されている。

総じて、研究対象と方法の拡散傾向のなかで、時代的重心の移動、第二世代の研究者の台頭、様々なレベルの総合化の模索などを試みながら、学的に「大人の仲間入り」を達成したといえよう。

### (3) ドイツ環境史研究の特質

これまでの検討結果に補足説明を加えながら、1970年代以降ドイツ環境史の研究動向の特質をまとめておこう。

第1に、ドイツにおける環境史研究は、現代の環境危機と環境運動の活発化を背景として急成長を



遂げてきた。その影響もあって、森林枯死、環境媒体の汚染、資源・エネルギー（木材）不足など、現代社会の直面する課題が好んで取り上げられ、環境史家による現代の環境危機への積極的な発言も目立った。1978年 W.ツォルンは、そのような態度に批判的姿勢を示したし、ウエケッターとホーエンゼーの共著の論題、『カサンドラの警告の声は大きくなったのか』<sup>9)</sup> (Uekötter / Hohensee, 2004) からも窺えるように、一部行き過ぎがあったことは否定できない。フライタークは、それを「ヒステリー現象」(Freytag, 2006, p.385)と、まで表現した。しかし、環境史家も参加した声高の警鐘がなければ、経済界・政界・環境団体・学会・メディアを挙げた真剣な取り組みが行われたのか、疑問を呈する立場があることを忘れてはならない。ピュッセンフェルトは、1980年代に二酸化硫黄排出量が80%減少した事実を挙げつつ、大衆の関心を喚起する上で果たしたその役割を高く評価している (Büschfeld, 2007, p.4)。筆者は、環境史家は長期的視野から、したがって近代経済学や法学の前提とは別の次元から、現代の環境問題を考察できる立場にあるだけに、積極的に発言すべきであると考えている。ウエケッターのように、19世紀から現代に至る広範なテーマを取り上げる研究者はもちろんのこと、多くの環境史家が積極的に発言していることを確認しておきたい。

第2に、1990年代以降に現代の環境危機・環境運動との結びつきが弛緩するにつれて第二世代の研究者も登場してきた (Freytag, 2006, p.399)。ドイツ環境史研究の開拓者と呼ばれた4人の歴史家、ミーク、ラトカウ、ジーフェーレ、ブリュッゲマイアー以外に多数の新世代の歴史家が台頭してきた。その代表格を2人紹介しよう。煤煙防止、環境保全運動、農業における生態系破壊まで幅広い問題を取り上げ、近年『19/20世紀環境史』を上梓して、文字通り新世代のリーダー格にまで上りつめたウエケッターである (Uekötter, 1999, 2003, 2007)。もう一人は、19世紀の耕地整理・水利事業という農業近代化に伴う環境的影響を「土地・水」資源に収斂させつつ考察し、ラトカウが1997/99年論文にあってまだ研究の遅れに苦情を鳴らした農業史の分野に、新たに切り込んで見せた、R.グダーマンである (Radkau, 1997/99, pp.479-480; Gudermann, 2000, 2003, 2007)。新世代の研究者の台頭が対象の大幅拡大に弾みをつけたことは間違いない (Toyka-Seid, 2003; Uekötter, 2007, pp.2-3; Braun, 2004, pp.387-389)。その点をみるために、ウエケッターが『19/20世紀環境史』にあって取り上げたテーマを、節の論題に沿って列記すれば、次の通りである (Uekötter, 2007, pp.45-88)。「理念とユートピアとしての自然」、「森林と営林史」、「エネルギー危機と資源問題」、「環境保全と都市公衆衛生」、「自然保全と景観保護 (エコ時代以前の社会運動)」、「1945年以降の環境運動」、「農業における環境史」、「危険・リスクとしての自然」。したがって、自然理念から森林・営林史、エネルギー・資源問題、環境媒体・産業汚染、公衆衛生、自然保全、農業史、リスク社会論まで実に幅広テーマが取り上げられている。

ただ、環境史が好んで取り上げる時代は、フライタークが異を唱えたように、近現代に偏っている (Freytag, 2006, pp.386-387)。その危険性としてフライタークは、2つの問題を挙げている。一方は、前近代社会において人間・環境が調和的關係にあったとの誤りを招く危険である。その通りだが、中・

9) ツォルンの所説に関して、典拠ともども田北, 2000, p.66を参照願いたい。

近世史を対象にした研究には、環境問題の史的遍在を強調するあまり、現代の環境危機の深刻さを相対化する危険性がつきまとうことを、忘れてはならない。18世紀以前を対象にした『ドイツ史百科事典』の刊行が準備中とのことだから、この両刃の剣をなす問題が、どのように処理されているのか、その成果発表を待望したい (Uekötter, 2007, p.4)。もう一方は、現代の環境問題・環境運動の危機感にひきずられるあまり、一般的な史学的問題が看過される危険である。この点での反省は進んでいる。いずれにせよ、トイカ=ザイトが総括したように、問題関心と接近方法の多様化を辿りながら、環境史は思春期を通過し、一つの学問的自立を達成した。もっとも、それが社会経済史や歴史科学全般に与えた衝撃は、ブリュッゲマイアーやピュッシュェンフェルトの指摘するように、必ずしも大きくはなく、この点が我々の課題となっている (Brüggemeier, 2003, p.1 : Büschenfeld, 2007, p.1)。

第3に、そのようなテーマの拡大は、接近方法の革新と結びついていた。フライタークは、「環境史における最広義の文化史的 (な接近の) 強調」 (Freytag, 2006, p.399) と、それを端的に表現している。政府・政策による企業・市民や自然・環境との関係を扱うにしても、そのような文化史的接近により「社会運動、環境闘争、その意味づけや構成を分析する」 (op.cit.,p.399) 方向に転じたというのである。換言すれば、法制度や政策的舵取りといったハード面に留まらず、政策・運動関連主体の行動を左右する法制的・社会経済的なゲーム・ルールや環境意識といった「ソフト」面にも光を当てる方法が広く採用されるようになったのである。筆者は、1990年代以降の研究潮流として環境問題をそれぞれの時代的文脈内に的確に位置づけて考える手法の定着と捉え、同時に、環境運動・政策関連主体の行動を左右するゲーム・ルールに着目した接近方法の必要性を強調していたが、その限りで、文化史的アプローチと広く重なり合っていることを確認しておきたい (田北, 2010)。もちろん、テーマ・方法の多様化が進行する今日、万能薬として単一の接近方法があるとは考えていない。方法は、個々の歴史家の課題と目標に大きく左右されるだけに、それに応じて工夫すべきであろう。

第4に、以上のような方法的多様化は、決して既存の理論的枠組みを容認することを、意味してはいない。とくに、経済還元主義や科学技術主義に代表されるような「大理論」に依拠した業績は、正面から批判の俎上に載せられている。ラトカウは、19世紀後半～20世紀初頭に環境劣化を招き深刻化させた原因として、既存の大理論に依拠する手法に鋭い批判を浴びせている (Radkau, 1997/99, pp. 365 366)。一つに、短見的な利益追求に終始する人間の利己心を強調する立場には、人間はそれほどエゴイスティックな存在かと疑問を呈する。次に、「科学技術の進歩」の盲信を強調する立場には、当時の支配エリートは技術主義者かと問いかける。さらに、資本主義の確立を前景に押し出す立場には、第一次世界大戦前ドイツにおける産業ブルジョワジーの単独支配に疑問を呈する、ヴェーラーの見解を対置している (ヴェーラー, 1983)。人間の行動を規定するのは、経済的要因だけではないのである。その意味からラトカウが、「実際的人类・環境関係の歴史にとっては、偉人・国家の行動より日常的な行動規範と慣習の方が、はるかに重要である」 (Radkau, 2003, p.184) と述べたのも、けだし当然なのである。その点、ウェケッターも変わらない (Uekötter, 2000, pp.111 112 : 2003, pp. 13 18)。「政府と裁判所」、あるいは「専門家や営業監督官」を産業利害の擁護者という暗黙の前提から出発する、アンデルセン、ブリュッゲマイアー、M.シュトルベルク、ギルハウスらの業績が、そ

ろってやり玉に挙げられて、その方法的限界を克服するための代替案として、ノースの制度経済学が援用されている (op.cit., p.16)。それ以外にも、大規模発電所を中心とした電力政策を経済的・技術的進化の産物と捉える所説に疑問を提示した D.ショット、あるいは「環境政策に関係する諸主体 (政府、企業、市民)間の関係を善玉・悪玉図式から離れて再検討することを提唱したジーマンとフライタークも、同じ立場に立つことを付言しておく (Schott, 1997 : Siemann / Freytag, 2003)。以上に見られるような大理論に囚われない接近方法の模索を、「進歩からの訣別」とまで表現することに異論はあるが (Uekötter, 2003, pp.14 15)、「経済成長・技術進歩」概念から離れて経済社会の歩みの再構成を目指していることは、間違いない。

この環境史の方法論の文脈で、言及しておきたい問題が2つある。一つは、最近流行の社会的構成主義の立場である (Mosley, 2001 : Luckin, 1997)。ドイツ学界に関する限り、汚染や環境を社会的・主観的に構成された理念として相対化する手法には、批判的な印象を受ける。代表例を2つ挙げてみよう。ラトカウは、自然をある時点で人間による認識の産物と捉える所説について、含蓄に富む所見を提示している。「純粹の構成主義が、歴史と無縁な領域において自然をめぐる論議を死点に導いたところで、歴史家にとって歴史的に形成された自然に関する熟慮が始まる」 (Radkau, 2003, p.179)。観念世界で遊ぶことなく、人手が加わり歴史的に形成された自然・環境と人間の交互関係を取り扱うべきだというのである。その点、社会的に再構成されたという「自然・環境」に関する考えから何が分かるのか、イメージ世界にだけ自然・環境は存在するのか、と問いかけたブリュッゲマイアーも変わらない (Brüggemeier, 2003, p.5)。

もう一方は、それと同じく本質的なエコシステム論者と人間中心主義者との論争である。この論争には、別の機会に詳しく論じたことがあるので、立ち入った論及は控え、ただ一点だけを確認しておきたい (田北, 2001, pp.69 71)。エコシステム論者の代表者、ジーフェーレは、人間を生態系の一部と理解し、生態系の運動を規定する要因としてエネルギー流に注目する所説を展開しているが (Sieferle, 1988, 1990, 2003)、太陽光エネルギー (狩猟・採集、農業) と化石燃料の時代区分のあり方を含め、あまりに大ざっぱに過ぎて歴史分析の道具立てには利用できない。この点は、多くの論者の指摘するとおりである。しかし、我々が環境問題を史的な観点から扱うとき、ともすればそのようなグローバルな要因の影響を看過しがちであることから、いわゆる「世界システム」論と同じように念頭に置くべき「視点」と位置づけておきたい (田北, 2000, pp.80 81)。この点での接近方法の対立は、人間中心主義の克服の是非をめぐる本質論と関わるだけに、霧散することはない。ジーフェーレとラトカウとが揃って同じ論文集に発表した2003年の論考にも、その痕跡は鮮明に残っている (Sieferle, 2003, p.42 : Radkau, 2003, p.168)。しかし、もはや大きな障害とはなっていないことは、既述の通りである。

第5に、環境史の対象を次のように理解する点では、広く意見の一致がある。すなわち、『社会科学・行動科学に関する国際的百科事典』第7巻の「環境史」の項目の冒頭に挙げられた、「(人間の行動によって惹起されたわけではない自然の変化を含めて) 人間が自然に与える衝撃と人間・自然の相互作用の歴史」 (Brüggemeier, 2001, p.4621) が、一つの共通項をなす (Braun, 2004, p.388 : Toyka-

Seid, 2003, p.424)。この無限ともいえる広がりもつ対象と様々な方法を使って取り組んでいるのが現状だが、歴史科学の基礎をなす、新たな類型の史料発掘と史料批判とに裏打ちされていることを看過してはならない。「子供時代を過ぎた」と幾分トーンダウンしたとはいえ、新たな類型の史料も発掘しつつ歴史学の主流のなったことは、否定しようもない (Uekötter, 2007, p.89)。

第6に、ドイツ学界における環境史の現状が、対象と方法の多様化によって特徴づけられているとすれば、研究者各人が方法的立場を明らかにして取り組んでいく必要がある。筆者の立場は、別の機会にも触れたことがあるが、人間の行動に影響する要因として法制度や文化・慣習から社会経済的力量を考慮に入れる制度経済学と通底する政策主体アプローチである。類似の手法は、ドイツの環境史家たちからも読み取れるが (Abelshausen, 1992: Uekötter, 2003, pp.15 16)、この場で取り上げておきたいのは、ラトカウの提起した方法論に関わる厄介な問題である (Radkau, 1997/99, p.365)。すなわち、過去の環境問題を評価する際に「価値尺度」をどのように設定するのかに関連している。ここでは2つの問題に限定して、筆者なりのなりの考えを述べてみたい。

まず、批判のターゲットに据えられるのは、今日の知識水準を前提にして過去の対応を糾弾する姿勢である。煤煙対策として煙突高度を引き上げる手法を、環境保全策を袋小路に追い込む「見せかけの解決」と評価する態度が、その典型例である。それと絡めて、産業汚染に対する同時代人の意識や代替的対策の存否などを問うべきであるとの指摘がある。いずれも、その通りだが、「第二帝政期の環境政策は、大都市住民の(要求の)優先順位を反映したもの」 (Uekötter, 2007, p.22)と、理解するウェケッターの所説が、的を射ているといえよう。すなわち、たびたび抵抗運動に走る近隣住民の被害・迷惑の回避が最優先されたというのである。後知恵からの評価ではなく、環境問題を時代状況のなかに的確に位置づけて考察する必要がある所以である。

もっと厄介なのは、「樹木か羊か：環境史における価値判断の問題」 (Radkau, 2003, pp.171 181) において森林・牧草地を例にして提示された問題である。我々は、現代の森林破壊が地球温暖化や生物多様性など様々な分野に与える連鎖的影響を知っているためもあって、森林保全を唱える営林官の見方を暗黙のうち受け入れてしまっている。当然、森林開発を通じて耕地・採草地の拡大をはかる農民も存在するし、どのような形で森林を維持すべきかをめぐっても論争があり、解決は決して容易ではない。また、森林以上に生物多様性の宝庫である牧草地についても、これまで以上に光を当てるべきだという。とくに、放牧される家畜種のなかで「悪玉」の代名詞とされている山羊についても、そのどん欲な食性というよりは、過放牧など人為的責任が問われるべきだという。いちいち、もっともな議論である。結局、我々は研究に取り組むまえに利害状況の複合性を考慮し、特定の立場から論ずる理由を説明してかかれと言いたいのだろうか。ラトカウは、人間の自然に与える影響を一方向的破壊的と捉えるだけでなく、生産的のみならず観点を持っている。それは、正しい理解である。しかし、それを突き詰めていけば、生物多様性を豊かにする立場こそが、重要であると言いたいのだろうか。筆者には、価値判断の次元ではなく、研究者の好みや、環境史に取り組むきっかけとなった課題との出会いといった事情の方が、大きな影響を与えているように思えるのだが。個人的経験に即して言えば、環境史を勉強し始めたころに出会った、バンベルク総合病院の医師で教授のレシュラウプの見

解に魅了されて、1802/03年ガラス工場闘争を調査したことがある（田北，2003a）。医学史の立場からレシュラウプを「エコ医者の開拓者」と理解したヴィシクに対し、ブリュッゲマイアーが、19世紀初頭の医師に対する社会的評価が低かった事実を突きつけて、鋭く批判したことは承知していた（Brüggemeier, 1996, p.245）。筆者は、レシュラウプを持ち上げることも、過小評価することもなく、彼の所説のもつ現代的含意を高く評価した。初学者に対して、環境史に取り組もうとする意思を挫きかねないような、高い敷居を設定することには、賛成できない。我々が銘記すべきなのは、時代状況内への的確な位置づけだけである。それさえ忘れなければ、価値判断にこだわる必要はないというのが、筆者の立場である。

第7に、環境史の分析単位をめぐるのは、残念ながら意見の一致はない。というより、ラトカウによる次の文章から読み取れるように、正面切った取り組みはない。「環境史における空間的単位をどのように考えるのかという問題は、ほとんど議論されてこなかった」（Radkau, 2001, p.503）。この表現は、『農業近代化と生態系への影響：18-20世紀のヴェストファーレン』と題する論文集の、「社会的認知と論議」の節の導入部で挙げられており、ヴェストファーレンを有意義な単位と位置づけられるかどうか、疑問を呈している。その文脈でラトカウは、局地か地球か、国民国家か「文明」（A.トインビー）か、それとも地形的な単位（山地、平野、沿岸など）かと、問いかける。そして通常は、研究戦略的な理由から、中間的単位が選択される傾向にあると述べている。新たな類型の史料の発掘・分析を必要とするだけに、やむを得ない選択であろう。最後に、ラトカウの挙げた空間的単位に関係した代表的な業績を一瞥しておこう。

ラトカウと並んでドイツ環境史の開拓者の一人に数えられるブリュッゲマイアーは、「国際的環境史」をテーマとする論文執筆に関する依頼を受けたとき、「なじみのない」概念として戸惑いを覚えたと回顧している（Brüggemeier, 2000, p.371）。「国際」にしる「環境」にしる、いずれも曖昧で極めて包括的な概念であり、それを組み合わせて環境史を論ずるのは困難だという。便法として、自然史、人間の自然・環境への干渉、生態学と欧州の対外的膨張、国際的な環境政策の4分野が取り上げられているが、この問題には機会を改めて論じてみたい（op.cit., pp.373-385）。また、生物学者のH.キュスターは、地殻的年代幅のもと人間の長期的営為によって景観が形成される経過を辿るが、その際、グローバルな世界が前提とされていることは言うまでもない（Küster, 1999, 2007）。これが、分析単位の一方向の極を構成している。

トイカ＝ザイトは、2003年の動向論文において「総合的叙述の試み」と題する1節を設け、その問題にも言及している（Toyka-Seid, 2003, pp.442-444）。一つは、ブリュッゲマイアーの「国際的環境史」に関する論考を引き合いに出したグローバルな単位である。次には、国民国家を単位とする業績である。国境線内で環境史を考察する手法には懐疑の姿勢を示しながら、ドイツ、英国、スイス、オーストリアの例が紹介されている（Brüggemeier, 1998；Clapp, 1994）。ウエケッターは、19/20世紀の米独の煤煙防止活動の比較を、そして2006年のF.ポスバッハ、エンゲルス、F.ワトソン3人共編の論文集は英独の成果の比較・総合化を、それぞれ試みている（Uekötter, 2003；Bosbach/Engels/Watson, 2006）。当然ながら、『ドイツ史百科事典』の1巻として『19/20世紀環境史』を上梓したウエ

ケッターも、国民国家の分析単位としての限界を銘記して、「中欧」を単位と見なしつつ、欧米学界の成果もふんだんに利用している (Uekötter, 2007, p.6)。最後に、より局地的な単位として都市が取り上げられている (Bernhardt, 2004 : Schott, 1997)。とくに、国際都市史会議による環境・資源問題への積極的な取り組みが紹介されているが、欧州人の入植以前の「原生野生」に独特の思い入れのある米国学界とは違って、人工的環境として都市を取り上げることに、大きな抵抗はないようだ (Büschfeld, 2007a)。

ドイツ環境史の開拓者の一人ミックは、環境問題を汚染物質の性格と、その地理的な影響範囲の広がりに対応した法規制のあり方を基準として、類型論を展開したことがある (Mieck, 1989 : 田北, 2000, p.72)。そこでは、1) 時代と地域を問わず存在する微生物汚染、2) 地方自治体の規制に服する手工業汚染、3) 地方自治体・政府が規制に乗り出す産業汚染、4) 農業における機械化・科学化に対応した農業汚染、5) 現場だけでなく広域に被害が及ぶ、原発や化学工場などの事故汚染の5類型が区別されている。ミック論文は1980年代に発表されていて、オゾンホール、地球温暖化や生物多様性を視野に収めてはいないが、分析単位を考える上で啓発的である。すなわち、対象とするテーマ・時代に応じて、複合的単位を考慮する必要があるからだ。一例を挙げれば、筆者の対象とする19世紀半ば～20世紀初頭ドイツにおける化学工業をめぐる環境闘争に関しては、自治体と政府レベルの法規制がせめぎ合っており、1878年創設の「ドイツ化学工業利益擁護連盟」の社会経済・政治的影響力の拡大を含めて中央政府・自治体の双方を視野に入れねばならないからである (田北, 2006, 2008)。環境史を拠る所にして、今日の地球環境問題に発言するからといって、何もグローバルな単位を研究対象に据える必要はない。長い時代射程の研究から得られる史的洞察が、近代経済学に基づく既成の処方箋の限界を幾重にもめぐり出してみせうからである。

第8に、環境史研究の独自の方向性を、どのように理解するのかという問題である。ブラウンは、トイカ=ザイトと同じように、次のように問題関心と方法の多様性を確認しつつ、幾つかの提案を行っている (Braun, 2004, p.387-388)。「ここには、しばしば目標、方法、および関係する問題・史料への接近視角をめぐる論争に現れてくるような関心の顕著な異質性が存在する」(op.cit., p.387)。一つに、既存の歴史科学の内部にあるのであれば、経済史、社会史、技術史のような学問分野と並んで独自の学問として確定する必要はない。次に、それら既成の分野にたいして独自の学問たりうるためには、独自の理論に裏打ちされた研究概念が必要である。しかし、今までのところ、それは十分に確定されていない。第三に、学問横断的で「人類生態学的に方向付けられた世界史」(op.cit., p.388)とでも呼べるような統合的環境史を目指す方向である。そのためには、独自の素材・対象、方法、「認識論的な上部構造」を備えるべきだが、多数の歴史家が批判するように、現実的ではない。

そもそも環境史も、既存の歴史科学の成果を踏まえつつ緩やかに離陸せざるをえなかった事実を、想起しなければならない。その独自の学問的確立のための悪戦苦闘ぶりが、いろいろな次元で痕跡をとどめている。一つは、ラトカウやウエケッターが、既存「大理論」への安易な依存として批判を浴びせた、ブリュッゲマイヤーやアンデルセンらの業績にしても、後にブリュッゲマイヤーが自己批判しているように (Brüggemeier, 2003, p.5)、そのような産みの苦しみと理解したい。二つ目に、政

治史的な節目に即した時代区分についても、同じように考えたい。ブリュッゲマイヤーとウエケッターは、それぞれドイツ環境史に関する時代的通観において、多少表現こそ違え、19世紀、ワイマール共和国とナチス期、1945年以降に区切っている (Brüggemeier, 1998 : Uekötter, 2007)。筆者は、環境史独自の指標に基づく時代区分が明瞭に提示されるまでは、既存の研究成果とすり合わせた「折衷」論の立場を主張してきた (田北, 2000, p.72)。最近、戦後のドイツ環境史をめぐる時代区分をめぐる、いくつかの積極的提案が行われ、指標の適否や連続・断絶をめぐる活発な論争が闘わされている。C.ピスターの提唱した「1950年代症候群」論、P.クッパーの提起した『1970年代診断』が、その代表例である (Pfister, 1996, 2003 : Kupper, 2003, 2005 : Hünmörder, 2005 : Uekötter, 2005)。ドイツ環境史のなかに、独自の指標による時代区分の動きが始まっていることに、注意を喚起したい。

この文脈で一言しておきたいことがある。それは、環境史の与える学的衝撃が、これまでのところ必ずしも大きくないという嘆きである。ビュッセンフェルトは、「新たな若返り治療のための概念を提供し、思春期と成人期を40年強で通過した社会史」と比較して、歴史科学全体に与えた影響の点で見劣りすると述べている (Büschefeld, 2007, p.1 2)。また、ブリュッゲマイヤーも、同時代史を含む現代史への研究成果の取り入れの遅れに苦情を鳴らしている (Brüggemeier, 2003, p.1 2)。その意味から、ハーンが、1998年に今後の課題に掲げた「環境次元を摂取した工業化像の再構成」は、いまだにそのまま残されている (Hahn, 1998, pp.115 121)。しかし、この状況は、同時に、我々にとって大きなチャンスである。各人が、選択したテーマと方法に則って理論・実証双方向からの検討を進めれば、大きく貢献できる余地が広く残されているからである。筆者は、人間を経済的関数と捉えるのではなく、人間行動にゲームのルールとして大きな影響を与える要素の一つに法制・文化・慣習を据える、制度経済学の視点から、同時に環境史の最大の学的特徴として「経済成長・技術進歩」概念から離れた接近を継承するかぎり、選択されるテーマの拡大を含めて、社会経済史学の再構成に寄与する豊かな可能性をもっていると、理解している。

## 文献一覧

- Abelshauer,W., 1994, Einführung. in: Abelshauer,W.(ed.), *Umweltgeschichte. Umweltverträgliches Wirtschaften in historischer Perspektive*. Göttingen, pp.7 10.
- Andersen,A., 1993, Umweltgeschichte. Forschungsstand und Perspektiven. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 33, pp.672 701.
- Andersen,A., 1993a, Umweltgeschichte—Abschied vom Fortschritt. in: Museum der Arbeit (Hamburg)(ed.), *Europa im Zeitalter des Industrielismus. Zur "Geschichte von unten" im europäischen Vergleich*. Hamburg, pp.75 86.
- Andersen,A., 1996, *Historische Technikfolgenabschätzung am Beispiel des Metallhüttenwesens und der Chemieindustrie 1850 1933*. Stuttgart.
- Andersen,A., 1997, Mentalitätwechsel und ökologische Konsequenzen des Konsumismus. in:

- Siegrist,H / Kaebel,H. / Kocka, J.(ed.), *Europäische Konsumgeschichte*. Frankfurt aM./ New York, pp.763 791.
- Andersen,A., 2000, Von der Metallhütte Nordenham zum 50er-Jahre-Syndrom. in: C.H. Hauptmeyer(ed.), *Mensch-Natur-Technik. Aspekte der Umweltgeschichte in Niedersachsen und angrenzenden Gebieten*. Bielefeld, pp.137 152.
- Andersen,A. / Spelsberg,G.(ed.), 1990, *Das Blaue Wunder. Zur Geschichte der synthetischen Farben*. Köln.
- Arnold,T., 1987, "Wir sind mit Wupperwasser getauft". *Ein Beitrag zur Umweltgeschichte Wuppertals*. Wuppertal, 1987.
- Arnold,T., 1990, "Ein leichter Geruch nach Fäulnis und Säure...". Wasserverschmutzung durch Färberei und frühe Farbenindustrie am Beispiel der Wupper. in: Andersen,A. / Spelsberg,G. (ed.), *Das Blaue Wunder*. Köln, pp.145 161.
- Bayerl,G., 1994, Prolegomenon der "Grossen Industrie". in: Abelshausen,W.(ed.), *Umweltgeschichte*, Göttingen, pp.29 57.
- Bayerl,G. / Meyer,T.(ed.), 2003, *Die Veränderung der Kulturlandschaft. Nutzung- Sichtweise- Planungen*. Münster / New York / München / Berlin.
- Bayerl,G. / Meyer,T., 2003a, Einleitung. in: Dieselbe(ed.), *Die Veränderung der Kulturlandschaft*. pp.1 9.
- Bayerl,G. / Troitzsch,U.(ed.), 1998, *Quellentexte der Umwelt von der Antike bis heute*. Göttingen.
- Bernhardt,C.(ed.), 2004, *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. 2. veränderte Auflage, Münster / New York / München / Berlin
- Bernhardt,C., 2004a, Umweltprobleme in der neueren europäischen Sdatgeschichte. in: Bernhardt,C.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. 2. veränderte Auflage, Münster / New York / München / Berlin, pp.5 23.
- Bosbach,F. / Engels, J.I. / Watson,F.(ed.), 2006, *Umwelt und Geschichte in Deutschland und Grossbritannien (Environment and History in Britain and Germany)*. München.
- Braun,H., 2004, Von der Technik- zur Umweltgeschichte. in: Schulz,G. et al.(ed.), *Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Arbeitsgebiete-Probleme-Perspektiven. 100 Jahre Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*. Wiesbaden / Stuttgart / München, pp.375 401.
- Brüggemeier,F.J., 1988, "Blauer Himmel über der Ruhr". Zur Wahrnehmung der Umwelt durch die Sozialdemokratie. in: Faulenbach,B. / Högl,G.(ed.), *Eine Partei in ihrer Region. Zur Geschichte der SPD im westlichen Westfalen*. Essen, pp.149 155.
- Brüggemeier,F.J., 1996, *Das unendliche Meer der Lüfte. Luftverschmutzung, Industrialisierung und Risikodebatten im 19. Jahrhundert*. Essen.
- Brüggemeier,F.J., 1998, *Tschernobyl 26. April 1986. Die ökologische Herausforderung*. München.



- Brüggemeier,F.J., 2000, New Development in Environmental History. in: *Proceedings Acts. 19th International Congress of Historical Sciences*. Oslo, pp.375 394.
- Brüggemeier,F.J., 2000a, Internationale Umweltgeschichte. in: Loth,W./ Osterhammel,J.(ed.), *Internationale Geschichte. Themen–Ergebnisse–Aussichten*. München, pp.371 386.
- Brüggemeier,F.J., 2001, Environmental History. in: Smelser,N./ Baltes,P..B. (ed.), *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences*. Vol.7, Amsterdam, pp.4621 4627.
- Brüggemeier,F.J., 2001a, Umweltgeschichte. in: Alt, K.W./ Rauschenberger, N.(ed.), *Öko–historische Reflexionen. Mensch und Umwelt zwischen Steinzeit und Silicon Valley*. Freiburg im Breisgau, pp.197 214.
- Brüggemeier,F.J., 2003, Umweltgeschichte—Erfahrungen, Ergebnisse und Erwartungen. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, 2003, pp.1 18.
- Brüggemeier,F.J., 2006, Umweltgeschichte in Deutschland. Ein Überblick. in: Bosbach,F./ Engels, J.I./ Watson,F.(ed.), *Umwelt und Geschichte in Deutschland und Grossbritannien*. Müünchen, pp.47 60.
- Brüggemeier,F.J./ Engels, J.I.(ed.), 2005, *Natur–und Umweltschutz nach 1945*. Frankfurt aM./ New York.
- Brüggemeier,F.J./ Engels, J.I., 2005a, Den Kinderschuhen erwachsen. Einleitende Worte zur Umweltgeschichte der zweiten Hälfte des 20. Jahrhunderts. in: Brüggemeier,F.J./ Engels, J.I. (ed.), *Natur–und Umweltschutz nach 1945*. Frankfurt aM./ New York, pp.10 19.
- Brüggemeier,F.J./ Rommerspacher,Th.(ed.), 1989, *Besiegte Natur. Geschichte der Umwelt im 19 und 20. Jahrhundert*. München. (平井旭訳, 2007, 『ドイツ環境史』 リーベル出版)
- Brüggemeier,F.J./ Rommelspacher,Th., 1992, *Blauer Himmel über der Ruhr. Geschichte der Umwelt im Ruhrgebiet 1840 1990*. Essen.
- Brüggemeier,F.J./ Toyka–Seid,M.(ed.), 1995, *Industrie–Natur. Lesebuch zur Geschichte der Umwelt im 19. Jahrhundert*. Frankufurt aM./ New York.
- Büschendorf, J., 1997, *Flüsse und Kloak. Umweltfragen im Zeitalter der Industrialisierung (1870 1918)*. Stuttgart.
- Büschendorf, J., 1998, Landwirtschaft und Ökologie in Deutschland. Untersuchungen zu Interessenkonflikten und Akteures als Beitrag zur historischen Umweltforschung. Ein Projekt der Volkswagen–Stiftung. in: *Arbeitskreis für Agrargeschichte–Newsletter*, 4, pp.58 59.
- Büschendorf, J., 2003, Ausbildung und Beratung in der Landwirtschaft zwischen Tradition, Modernisierung und Umweltschutz. Ein Betrag zur Agrar–Umweltgeschichte. in: *Geschichte in Westen*, 18, pp.29 46.
- Büschendorf, J., 2007, Anmerkungen zur Natur– und Umweltgeschichte. (Natur– und Umweltgeschichte in Westfalen). in: *Westfälische Forschungen*, 57, pp.1 11.

- Büschendorf, J., 2007a, Themenfelder einer Umweltgeschichte der Stadt—Das Beispiel Bielefeld. in: *Westfälische Forschungen*, 57, pp.201 228.
- Cottbuser Studien zur Geschichte von Technik, Arbeit und Umwelt*. Münster / New York.
1. Bayerl, G. / Fuchsloch, N. / Meyer, T. (ed.), 1996, *Umweltgeschichte Methoden, Themen, Potentiale*. (Bd.1).
  2. Herrmann, B. / Kaup, M., 1997, "Nun blüht es von End' zu End' all überall: die Eindeichung des Nieder-Oderbruches, 1747 1753". (Bd.4)
  3. Bayerl, G. / Weber, W. (ed.), 1998, *Sozialgeschichte der Technik: U. Troitzsch zum 60. Geburtstag*. (Bd.7).
  4. Steinsiek, P. M., 1999, *Nachhaltigkeit auf Zeit: Waldschutz im Westharz vor 1800*. (Bd.11).
  5. Bernhardt, C. (ed.), 2001, *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. (Bd.14).
  6. Bayerl, G. / Maier, D. (ed.), 2002, *Die Niederlausitz vom 18. Jahrhundert bis heute: eine gestörte Kulturlandschaft?* (Bd.19).
  7. Köstering, S. / Rüb, R. (ed.), 2003, *Müll von gestern? : eine umweltgeschichtliche Erkundung in Berlin und Brandenburg*. (Bd.20).
  8. Reith, R. / Meyer, T. (ed.), 2003, "Luxus und Konsum" : eine historische Annäherung. (Bd.21).
  9. Bayerl, G. / Meyer, T. (ed.), 2003, *Die Veränderungen der Kulturlandschaft : Nutzung—Sichtweise—Planungen*. (Bd.22).
- Crosby, A. W., 1995, The Past and Present of Environmental History. in: *American Historical Review*, 100, pp.1177 1189.
- Dienel, H. L., 1997, *Herrschaft über die Natur? Naturvorstellung deutscher Ingenieure 1871 1914* Bassum.
- Ditt, K. / Gudermann, R. / Rüsse, N. (ed.), 2001, *Agrarmodernisierung und ökologische Folgen. Westfalen vom 18. bis 20. Jahrhundert*. Paderborn / München / Wien / Zürich.
- Ditt, K. / Gudermann, R. / Rüsse, N., 2001a, Einleitung: Forschungsstand und Fragestellung. in: Ditt, K. / Gudermann, R. / Rüsse, N. (ed.), *Agrarmodernisierung und ökologische Folgen*. pp.1 14.
- Dix, A., 2003, Die ökologischen Folgen der modernen Weltwirtschaft des 19. Jahrhunderts in Deutschland. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 42, pp.81 99.
- Freytag, N., 2006, Deutsche Umweltgeschichte— Umweltgeschichte in Deutschland. Erträge und Perspektiven. in: *Historische Zeitschrift*, 283 2, pp.383 407.
- Gebessler, A., 2004, Stadt am Fluss— Stadt am Wasser. in: *Die Alte Stadt*, 31, pp.239 240.
- Geschichte des Natur- und Umweltschutzes*. Frankfurt aM.
1. Radkau, J. / Uekötter, F. (ed.), 2003, *Naturschutz und Nationalsozialismus*. (Bd.1)
  2. Schmoll, F., 2004, *Erinnerung an die Natur: die Geschichte des Naturschutzes im deutschen*

- Kaiserreich*. (Bd.2)
3. Uekötter,F., 2004, *Naturschutz im Aufbruch: eine Geschichte des Naturschutzes in Nordrhein–Westfalen 1945 1980*. (Bd.3)
4. Brüggemeier,F.J./ Engels, J.I.(ed.), *Natur– und Umweltschutz nach 1945: Konzepte, Konflikte, Kompetenzen*. (Bd.4)
5. Leh,A., 2006, *Zwischen Heimatschutz und Umweltbewegung: die Professionalisierung des Naturschutzes in Nordrhein–Westfalen 1945 1975*. (Bd.5)
- Gilhaus,U., 1995, "Schmelzenkinder der Industrie". *Umweltschmutzung, Umweltpolitik und sozialer Protest im Industriezeitalter in Westfalen 1845 1914*. Paderborn.
- Gilhaus,U., 2003, Westfälische Liberalisierung als Zäsur der Umweltgeschichte. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, pp.101 126.
- Gorman,H.S., 1999, Efficiency, Environmental Quality, and Oil Field Brines: The Success and Failure of Pollution Control by Self–Regulation. in: *Business History Review*, 73, pp.601 640.
- Grewe,B.S., 2003, Das Ende der Nachhaltigkeit? Wald und Industrialisierung im 19. Jahrhundert. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, pp.61 79.
- Gudermann,R., 2000, *Morastwelt und Paradies. Ökonomie und Ökologie in der Landwirtschaft am Beispiel der Meriorationen in Westfalen und Brandenburg (1830 1880)*. Paderborn / München / Wien / Zürich.
- Gudermann,R., 2003, "Wasserschütze" und "Wasser–Diebereien". Konflikte zwischen Müller und Bauern im Prozess der Agrarmodernisierung im 19. Jahrhundert. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, pp.19 38.
- Gudermann,R., 2007, Wasser und Boden als Ressource. Die landwirtschaftlichen Meliorationen des 19. Jahrhunderts im Schnittpunkt von Wirtschafts–, Sozial–, Technik–und Umweltgeschichte –Westfalen und Brandenburg im Vergleich. in: *Westfälische Forschungen*, 57, pp.103 132.
- Guillerm,A., 2004, Zur Geschichte industrieller Altlasten in Frankreich. in: Bernhardt,Ch.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*, Münster / New York / München / Berlin, pp.41 51.
- Hahn,H.W., 1998, *Die industrielle Revolution in Deutschland*. München.
- Hauptmeyer,C.H.(ed.), 2000, *Mensch – Natur – Technik. Aspekte der Umweltgeschichte in Niedersachsen und angrenzenden Gebieten*. Bielefeld.
- Henneking,R., 1994, *Chemische Industrie und Umwelt. Konflikte um Umweltbelastungen durch die chemische Industrie am Beispiel der Schwerchemischen, Farben– und Düngemittelindustrie der Rheinprovinz (ca.1800 1914)*. Stuttgart.
- Henning,F.W., 1996, *Handbuch der Wirtschafts–und Sozialgeschichte Deutschlands*. Bd.2, Paderborn / München / Wien.

- Hohmann,C., 1996, *Arbeitsmedizin und Arbeitshygiene in der Gewerbeordnung des Norddeutschen Bundes vom 21. 06. 1869*. Düsseldorf.
- Hünemörder,K.F., 2005, 1972 Epochenschwelle der Umweltgeschichte? in: Brüggemeier,F.J./ Engels,J.I.(ed.), *Natur- und Umweltschutz nach 1945*. Frankfurt aM./ New York, pp.124 144.
- Hüttenberger, P., 1992, Umweltschutz vor dem Ersten Weltkrieg. Ein sozialer und bürokratischer Konflikt. in: Hoebink,H.(ed.), *Staat und Wirtschaft an Rhein und Ruhr 1816 1991*. Essen, pp.268 284.
- Kellenbenz,H.(ed.), 1982, *Wirtschaftsentwicklung und Umweltbeeinflussung (14. 20. Jharhundert)*. Wiesbaden.
- Kocka, J., 2004, *Das lange 19. Jahrhundert. Arbeit, Nation und bürgerliche Gesellschaft. (Gebhardt Handbuch der deutschen Geschichte. Bd.13: Zehnte, völlig neu bearbeitete Auflage)*, Stuttgart.
- Konold,W., 2004, Wasser als Lebensgrundlage der Stadt. in: *Die alte Stadt*, 31, pp.283 297.
- Köstering,S./ Rüb,R.(ed.), 2003, *Müll von gestern? Eine umweltgeschichtliche Erkundung in Berlin und Brandenburg. Münster / New York / München / Berlin*.
- Köstering,S./ Rüb,R. 2003a, Einleitung zum "Müll von gestern?". in: Köstering,S./ Rüb,R. (ed.), *Müll von gestern?* Münster / New York / München / Berlin. pp.11 14.
- Krappauf,L., 2000, Spuren früher Montanwirtschaft im Harz. in: Hauptmeyer,C.H.(ed.), *Mensch-Natur-Technik*. Bielefeld, pp.17 30.
- Kupper,P., 2003, Die "1970er Diagnose". Grundsätzliche Überlegungen zu einem Wendepunkt der Umweltgeschichte. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, pp.325 348.
- Kupper,P., 2005, Gestalten statt Bewahren: Die umweltpolitische Wende der siebziger Jahre am Beispiel des Atomenergiediskurses im Schweizer Naturschutz. in: Brüggemeier,F.J./ Engels,J.I. (ed.), *Natur- und Umweltschutz nach 1945*. Frankfurt aM./New York, pp.145 161.
- Küster,H., 1999, *Geschichte der Landschaft in Mitteleuropa. Von der Eiszeit bis zur Gegenwart*. München.
- Küster,H., 2007, Aus Natur wird Landschaft: Westfalen. in: *Westfälische Forschung*, 57, pp.13 26.
- Leidinger,P., 1991, Von der historischen Umweltforschung zur Historischen Ökologie. Ein Literaturbericht. in: *Westfälische Forschungen*, 41, pp.495 516
- Luckin,B., 1997, Town, Country and Metropolis: The Formation of an Air Pollution Problem in London, 1800 1870. in: Schott,D.(ed.), *Energie und Stadt in Europa. Von der Vorindustriellen "Holznot" bis zur Ölkrise der 1970er Jahre*. Stuttgart, pp.77 92.
- Marek,D., 1994, Der Wege zum fossilen Energiesystem. Ressourcengeschichte der Kohle am Beispiel der Schweiz 1850 1910. in: Abelshauer,W.(ed.), *Umweltgeschichte*. Göttingen, pp. 57 75.
- Massard Guilbaud,G., 2004, Einspruch ! Stadtbürger und Umweltverschmutzung in Frankreich des

19. Jahrhunderts. in: Bernhardt, Ch. (ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. Münster / New York / München / Berlin, pp.41 51.
- McNeill, J.R., 2000, *Something New Under The Sun. An Environmental History of the Twentieth-Century World*. London / New York.
- Mieck, I., 1967, "Aerem corrumpere non licet". Luftverunreinigung und Immissionsschutz in Preussen bis zur Gewerbeordnung 1869. in: *Technikgeschichte*, 34, pp.36 78.
- Mieck, I., 1980, Umweltschutz in Preussen zur Zeit der Frühindustrialisierung. in Büsch, O. / Neugebauer, W. (ed.), *Moderne Preussische Geschichte 1648 1947*. Bd.2, Berlin / New York, pp.1141 1167.
- Mieck, I., 1982, Umweltschutz zur Zeit der frühen Industrialisierung. in: Kellenbenz, H. (ed.), *Wirtschaftsentwicklung und Umweltbeeinflussung*. Wiesbaden, pp.231 246.
- Mieck, I., 1989, Industrialisierung und Umweltschutz, in: Calliess, J. / Rösen, J. / Striegnitz, M. (ed.), *Mensch und Umwelt in der Geschichte*, Pfaffenweiler, pp.205 228.
- Mieck, I., 1993, Wirtschaft und Gesellschaft Europas von 1650 bis 1850. in: Mieck, J. (ed.), *Europäische Wirtschafts- und Sozialgeschichte von der Mitte des 17. Jahrhunderts bis zur Mitte des 19. Jahrhunderts*. Stuttgart, pp.1 223.
- Mooser, J., 2001, Einführung: Moderne Landwirtschaft. Bemerkungen zu langfristigen Weichenstellungen und Phasen der agrarischen Modernisierung seit dem 18. Jahrhundert. in: Ditt, K. / Gudermann, R. / Rüsse, N. (ed.), *Agrarmodernisierung und ökologische Folgen*. Paderborn / München / Wien / Zürich, pp.15 22.
- Mosley, S., 2001, *The Chimney of the World. A History of Smoke Pollution in Victorian and Edwardian Manchester*. Cambridge.
- Neuber, D., 2000, Das Beispiel Schaumburg im Rahmen einer energie- und umweltgeschichtlichen Untersuchung des Niedersächsischen Steinkohlenbergbaus. in: Hauptmeyer, C.H. (ed.), *Mensch-Natur-Technik*. Bielefeld, pp.61 78.
- Neuber, D., 2005, Die bittere Seite der Zuckerfabrik Munzel-Holtensen. Problematische Fabrikabwässer Ende des 19. Jahrhunderts. in: *Niedersächsisches Jahrbuch für Landesgeschichte*, 77, pp.227 252.
- Neuber, D. / Hauptmeyer, C.H. / Grohmann, O., 2000, Stand und Aufgaben der umweltgeschichtlichen Forschung, insbesondere in Niedersachsen. in: Hauptmeyer, C.H. (ed.), *Mensch-Natur-Technik*. Bielefeld, pp.9 16.
- Niedersächsisches Jahrbuch für Landesgeschichte*. (NJLG と略す)
1. Tier in der Niedersächsischen Geschichte. Vorträge auf der Tagung der Historischen Kommission für Niedersachsen und Bremen vom 23. bis 25. Mai 2003 in Verden.  
in: *NJLG*, 76, 2004, pp.1 132.

2. Die Stadt und Ihr Umland. Vorträge auf der Historischen Kommission für Niedersachsen und Bremen vom 5. bis 7. Mai 2005 in Uelzen. in: *NJLG*, 78, 2006, pp.1 166.
  3. Begrenzte Ressourcen. Der Umgang mit Rohstoffen und Energie im Mittelalter und in der Neuzeit. Vorträge auf der Tagung der Historischen Kommission für Niedersachsen und Bremen in Clausthal-Zellerfeld vom 11.bis 13. Mai 2007. in: *NJLG*, 80, 2008, pp.1 240.
- Niemi,M., 2004, The "disappearance" of environmental problems: The re-focusing of Public Health Policies in British and Swedish cities, 1890 1920. in: Bernhard,Ch.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. Münster/New York, pp.121 141.
- Olmer,B., 1998, *Wasser. Historisch. Zu Bedeutung und Belastung des Umweltmediums in Ruhr 1870 1950*. Frankfurt aM./ Berlin / Bern / New York / Paris / Wien.
- Papaioannou,D./ Sapounaki-Drakaki,L., 2004, Policies for clean air: The air pollution nuisance in Athens. in: Bernhard,Ch.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. Münster / New York, pp.211 224.
- Pfister,C.(ed.),1996, *Das 1950er Syndrom. Der Weg in die Konsumgesellschaft*. Bern / Wien.
- Pfister,C., 2003, Energiepreis und Umweltbelastung. Zum Stand der Diskussion über das "1950er Syndrom". in: Siemann,W.(ed.), *Umweltgeschichte. Themen und Perspektiven*. München, pp.61 86.
- Pfister,U., 2001, Einführung: Agrarmodernisierung. in: Ditt,K./ Gudermann,R./ Rüsse,N.(ed.), *Agrarmodernisierung und ökologische Folgen. Westfalen vom 18 bis 20 Jahrhundert*. Paderborn / München / Wien / Zürich, pp.129 133.
- Pohl,H./ Schaumann,R./ Schönert-Röhlk,F., 1983, *Die chemische Industrie in den Rheinlanden während der industriellen Revolution*. Bd.1 (Die Farbenindustrie), Wiesbaden.
- Pohl,H.(ed.), 1993, *Industrie und Umwelt. Referate und Diskussionsbeiträge der 16.öffentlichen Vortragsveranstaltung der Gesellschaft für Unternehmensgeschichte am 15.5.1991 in Mannheim*. Stuttgart.
- Radkau, J., 1983, Holzknappung und Krisenbewusstsein im 18.Jahrhundert. in: *Geschichte und Gesellschaft*, 9, pp.513 543.
- Radkau, J., 1986, Zur angeblichen Energiekrise des 18.Jahrhunderts. Revisionistische Betrachtung zur "Holznot". in: *VSWG*, 73, pp.1 37.
- Radkau, J., 1986a, Wurde die Gefährdung der Natur durch den Menschen nicht rechtzeitig erkannt? Naturkult und Angst vor Holznot um 1800. in: Lübbe.H./ Ströker,E.(ed.), *Ökologische Probleme im kulturellen Wandel*. Paderborn, pp.47 78.
- Radkau, J., 1989, *Technik in Deutschland. Vom 18.Jahrhundert bis zur Gegenwart*. Frankfurt aM.
- Radkau, J., 1990, Umweltprobleme als Schlüssel zur Periodisierung der Technikgeschichte. in: *Technikgeschichte*, 57, pp.345 361.

- Radkau, J., 1994, Was ist Umweltgeschichte. in: Abelshausen, W.(ed.), *Umweltgeschichte*. Göttingen, pp.11 28.
- Radkau, J., 1996, Technik und Umwelt. in: Ambrosius, G.(ed.), *Moderne Wirtschaftsgeschichte*. München, pp.119 136.
- Radkau, J., 1997/99, Technik- und Umweltgeschichte. Teil I, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* (GWU と略す), 48, pp.479 497. Teil II, in: *GWU*, 50, pp.250 258. Teil III, in: *GWU*, pp.356 384.
- Radkau, J., 2000, *Natur und Macht. Eine Weltgeschichte der Umwelt*, München.
- Radkau, J., 2001, Einführung: Gesellschaftliche Wahrnehmung und Diskussion. in: Ditt, K./ Gudermann, R./ Rüsse, N.(ed.), *Agrarmodernisierung und ökologische Folgen. Westfalen vom 18. bis 20. Jahrhundert*. Paderborn/München/Wien/Zürich, pp.503 508.
- Radkau, J., 2003, Nachdenken über Umweltgeschichte. Scheuklappen und Sackgasse der historischen Umweltforschung in: Siemann, W./ Freytag, N.(ed.), *Umweltgeschichte*. München, pp.165 186.
- Radkau, J./ Uekötter, F.(ed.), 2004, *Naturschutz und Nationalsozialismus*, Frankfurt aM./New York.
- Radkau, J., 2004a, Naturschutz und Nationalsozialismus— wo ist das Problem? in: Radkau, J./ Uekötter, F.(ed.), *Naturschutz und Nationalsozialismus*. Frankfurt aM./New York, pp.41 54.
- Rosen, C.M., 1997, Industrial Ecology and the Greening of Business History. in: *Business and Economic History*, 26 1, pp.123 137.
- Rosen, C.M./ Sellers, C., 1999, The Nature of the Firm: Towards an Ecocultural History of Business. in: *Business History Review*, 73, pp.577 600.
- Schott, D., 1997, Energie und Stadt in Europa. in: Schott, D.(ed.), *Energie und Stadt in Europa. Von der Vorindustriellen "Holznot" bis zur Ölkrise der 1970er Jahre*. Stuttgart, pp.7 42.
- Schott, D., 1997a, Power for Industry: Electrification and its strategic use for industrial promotion. The Case of Mannheim. in: Schott, D.(ed.), *Energie und Stadt in Europa*. Stuttgart, pp.169 193.
- Schott, D., 2004, Urban Environmental History: What Lessons are there to be learnt? in: *Boreal Environment Research*, 9, pp.519 528.
- Schramm, E., 1984, Soda-Industrie und Umwelt im 19. Jahrhundert. in: *Technikgeschichte*, 51, pp.190 216.
- Schramm, E., 1987, Historische Umweltforschung und Sozialgeschichte des 19. und 20. Jahrhundert. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 27, 1987, S.439 455.
- Schramm, E., 1989, Zu einer Umweltgeschichte des Bodens. in: Brüggemeier, F.J./ Rommerspacher, Th.(ed.), *Besiegte Natur*. München, pp.86 105.
- Schulz, G., 2004, 100 Jahre VSWG Vorbemerkungen zum Jubiläumsband. in: Schulz, G.(ed.), *Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Arbeitsgebiete-Probleme-Perspektiven. 100 Jahre VSWG*,

- Stuttgart, pp.9 15.
- Serteri,S.N., 2004, Industrial Pollution and Urbanisation. Ancient and new industrial areas in the early 20th century Italy. in: Bernhardt,C.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. Münster /New York, pp.165 182.
- Sieferle,R.P., 1982, *Der unterirdische Wald. Energiekrise und Industrielle Revolution*. München.
- Sieferle,R.P., 1984, *Fortschrittfeinde? Opposition gegen Technik und Industrie von der Romantik bis zur Gegenwart*. München.
- Sieferle,R.P.(ed.), 1988, *Fortschritte der Naturzestörung*. Frankfurt aM.
- Sieferle,R.P., 1988a, Perspektiven einer historischen Umweltforschung. in: Sieferle,R.P.(ed.), *Fortschritte der Naturzestörung*. Frankfurt aM., pp.307 376.
- Sieferle,R.P., 1989, Energie. in: Brüggemeier,F.J./Rommelspacher,Th.(ed.), *Besiegte Natur*. München. pp.20 41.
- Sieferle,R.P., 2003, Nachhaltigkeit in universalhistorischer Perspektive. in: Siemann,W.(ed.), *Umweltgeschichte*. München, pp.39 60.
- Siemann,W., 1995, *Vom Staatenbund zum Nationalstaat. Deutschland 1806 1871*, Frankfurt aM.
- Siemann,W.(ed.), 2003, *Umweltgeschichte. Themen und Perspektiven*. München.
- Siemann,W./ Freytag,N., 2003a, Umweltgeschichte – eine geschichtswissenschaftliche Grundkategorie. in: Siemann,W.(ed.), *Umweltgeschichte*. München, pp.7 20.
- Stine, J.K./Tarr, J.A., 1998, At the Intersection of Histories: Technology and the Environment. in: *Technology and Culture*, 39, pp.601 640.
- Tarr, J.A., 2004, Urban History and Environmental History in the United States: complementary and overlapping fields. in: Bernhardt,C.(ed.), *Environmental Problems in European Cities in the 19th and 20th Century*. Münster /New York /München /Berlin, pp.25 39.
- Toyka-Seid,M., 2003, Mensch und Umwelt in der Geschichte. Neues aus dem produktiven Selbstfindungsprozess der Umweltgeschichte. in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 43, pp.423 447.
- Troitzsch,U., 1981, Historische Umweltforschung: Einleitende Bemerkungen über Forschungsstand und Forschungsaufgaben. in: *Technikkgeschichte*, 48, pp.177 190.
- Troitzsch,U., 1989, Umweltprobleme im Spätmittelalter und der frühen neuzeit aus technikgeschichtlicher Sicht. in: Herrmann,B.(ed.), *Umwelt in der Geschichte.Beiträge zur Umweltgeschichte*. Göttingen, pp.89 110.
- Tucker,R.P./Russell,E.(ed.), 2004, *Natural Enemy, Natural Ally. Toward an Environmental History of War*. Corvallis.
- Uekötter,F., 1999, Divergent Responses of Identical Problems: Businessmen and the Smoke Nuisance in Germany and the United States, 1880 1917. in: *Business History Review*,73, pp.641 674.



- Uekötter,F., 1999a, Die Kommunikation zwischen technischen und juristischen Experten als Schlüsselproblem der Umweltgeschichte. Die preussische Regierung und die Berliner Rauchplage. in: *Technikgeschichte*, 66, pp.1 31.
- Uekötter,F., 2000, Konsens ohne Strategie. Der Kampf gegen die großstädtische Kohlenrauchplage in Braunschweig und Hannover. in:Hauptmeyer,C.H.(ed.), *Mensch-Natur-Technik*. Bielefeld, pp.111 135.
- Uekötter,F., 2003, *Von der Rauchplage zur ökologischen Revolution. Eine Geschichte der Luftverschmutzung in Deutschland und den USA 1880 1970*. Essen.
- Uekötter,F., 2003a, Einleitung zu "Naturschutz und Nationalsozialismus". in: Radkau,J./ Uekötter, F.(ed.), *Naturschutz und Nationalsozialismus*. Frankfurt aM./New York, pp.13 29.
- Uekötter,F., 2003b, Das organisierte Versagen. Die deutsche Gewerbeaufsicht und die Luftverschmutzung vor dem ökologischen Zeitalter. in: *Archiv für Sozialgeschichte*,43, pp.127 150
- Uekötter,F., 2003c, Die Bauern und das ökologische Wissen. Plädoyer für die eine Umweltgeschichte der Landwirtschaft. in: *Arbeitskreis für Agrarchichte Newsletter*, 14, pp.18 24.
- Uekötter,F., 2004, *Naturschutz im Aufbruch. Eine Geschichte des Naturschutzes in Nordrhein-Westfalen 1945 1980*. Frankfurt aM./New York.
- Uekötter,F., 2005, Erfolglosigkeit als Dogma? Revisionistische Bemerkungen zum Umweltschutz zwischen dem Ende des Zweiten Weltkriegs und der "ökologischen Wende". in: Brüggemeier, F.J./ Engels, J.I.(ed.), *Natur- und Umweltschutz nach 1945*. Frankfurt aM./New York, pp.105 123
- Uekötter,F., 2007, *Umweltgeschichte im 19. und 20. Jahrhundert. (Enzyklopädie deutscher Geschichte, Bd.81)*, München.
- Uekötter,F., 2007a, Mutmassung über Mais- Anmerkungen zu Westfalens erfolgreichsten Neophyten. in: *Westfälische Folschungen*, 57, pp.151 171.
- Uekötter,F./ Hohensee, J.(ed.), 2004, *Wird Cassandra heiser? Der Geschichte falscher Ökoalarme*. Stuttgart.
- Uekötter,F./ Hohensee, J., 2004a, Einleitung. in: Uekötter,F./Hohensee, J.(ed.),*Wird Cassandra heiser?* Stuttgart, pp.9 23.
- Wässele,W., 1993, Das Verhältnis von Industrie und Umwelt seit 1945. in: Pohl,H.(ed.), *Industrie und Umwelt*. Stuttgart, pp.45 68.
- Watson,F./ Engels, J.I., 2006, Einleitung zu Bosbach.F./ Engels, J.I./ Watson,F.(ed.), *Umwelt und Geschichte in Deutschland und Grossbritannien*. München, pp.23 35.
- Wengenroth,U., 1993, Das Verhältnis von Industrie und Umwelt seit der Industrialisierung. in: Pohl,H.(ed.), *Industrie und Umwelt*. Stuttgart, pp.25 44.
- Winiwarter,V., 2001, Landwirtschaft, Natur und ländliche Gesellschaft im Umbruch. Eine umwelt-

- historische Perspektive zur Agrarmodernisierung. in: Ditt,K./Gudermann,R./Rüsse,N.(ed.),  
*Agrarmodernisierung und ökologische Folgen*. Paderborn/München/Wien/Zürich.
- アーノルト,D.(飯島昇蔵/川島耕司訳), 1999, 『環境と人間の歴史：自然, 文化, ヨーロッパの経済的  
拡張』新評論
- 赤津正彦, 2003, 「産業革命期イギリスにおける大気汚染問題：1821年『蒸気炉煙害除去法』を中心  
に」『社会経済史学』69 4, pp.71 91
- 安藤精一, 1992, 「自然と経済：日本公害史」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望(社会  
経済史学会創立60周年記念)』有斐閣, pp.335 344
- 石弘之, 1999, 「いまなぜ環境史なのか」, 石弘之/樺山紘一/安田喜憲/義江彰夫編『環境と歴史(ラ  
イブラリ相関社会科学6)』新生社, pp.1 10
- ヴェーラー, H.U.(大野英二/肥前栄一訳), 1983, 『ドイツ帝国1871 1918』未来社
- 上田 信, 2002, 「生態環境の歴史——中国研究からの提言」社会経済史学会編『社会経済史学の課  
題と展望(社会経済史学会創立70周年記念)』有斐閣, pp.105 118
- 大月康弘, 2002, 「ブローデル後の地中海史研究」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望(社  
会経済史学会創立70周年記念)』有斐閣, pp.75 88
- 鬼頭 宏, 2003, 「環境経済史への挑戦：森林・開発・市場」『社会経済史学』68 6, pp.3 12
- 鬼頭 宏, 2002, 『文明としての江戸システム』講談社
- クロスビー, A.W.(佐々木昭夫訳), 1998, 『ヨーロッパ帝国主義の謎：エコロジーから見た10~20世  
紀』岩波書店
- 杉原 薫, 2002, 「第2編(グローバル・ヒストリーと国家システム)の狙い」社会経済史学会編  
『社会経済史学の課題と展望(社会経済史学会創立70周年記念)』有斐閣, p.62
- 田北廣道, 1985, 「1960年以降東ドイツ学界における中世盛期・後期の都市・農村関係に関する研究」  
(上)(下)『商学論叢(福岡大学)』29 4, pp.1075 1108: 同30 2, pp.65 111
- 田北廣道, 1986/87, 「1960年以降西ドイツ学界における中世盛期・後期の都市・農村関係に関する研  
究」(上)(中)(下), 『商学論叢』31 1, pp.113 154: 同32 1, pp.59 93: 同32 3, pp.131 162
- 田北廣道, 1987, 「西欧中・近世のツンフト・手工業史に関する最近の研究動向：西ドイツ学界を中  
心に」『商学論叢』31 3/4, pp.399 434
- 田北廣道, 1987a, 「ドイツ学界における『プロト工業化』研究の現状(1): 東ドイツ学界の場合」『商  
学論叢』32 2, pp.133 162
- 田北廣道, 1987b, 「中世都市の研究方法としての『中心地』論の意義と限界：ドイツ学界を中心にし  
て」『商学論叢』32 3, pp.35 67
- 田北廣道, 1991, 「中世後期職人史研究の新動向：1970年以降のドイツ学界」『総合研究所報(福岡大  
学)』135, pp.1 31
- 田北廣道, 1994, 「世界システム論の史的可能性：先資本主義システム研究の進展を受けて」細江守  
紀・濱砂敬郎『現代経済の革新と展望』九州大学出版会, pp.239 264

- 田北廣道, 1995, 「都市と農村」朝治啓三・江川温・服部良久編著『西欧中世史』(下), ミネルヴァ書房, pp.131 156
- 田北廣道, 1996, 「プロト工業化から手工業地域へ: 第8回国際経済史会議以降の欧米学界」『経済学研究』62 1/6, pp.149 169
- 田北廣道, 1997, 「西欧工業化期の経済と制度: 第二世代の『プロト工業化』研究の成果に寄せて」伊東弘文編『現代経済システムの展望』九州大学出版会, pp.265 287
- 田北廣道, 1997a, 「市場史の射程 (問題提起)」『社会経済史学』62 2, pp.1 9
- 田北廣道, 2000, 「ドイツ学界における環境史研究の現状: エネルギー問題への接近方法を求めて」『経済学研究 (九州大学経済学会)』67 3, pp.61 85.
- 田北廣道, 2003, 「18 19世紀ドイツにおけるエネルギー転換: 『木材不足』論争をめぐる」『社会経済史学』68 6, pp.41 54
- 田北廣道, 2003a, 「『ドイツ最古・最大』の環境闘争: 1802/03年バンベルク・ガラス工場闘争に関する史料論的概観」『経済学研究』69 3/4, pp.235 269.
- 田北廣道, 2004, 『日欧エネルギー・環境政策の現状と展望: 環境史との対話』九州大学出版会
- 田北廣道, 2004a, 「19 20世紀ドイツにおける環境行政の諸局面: 環境史の挑戦」『経済学研究』70 4/5, pp.311 339
- 田北廣道, 2004b, 「19世紀ドイツ環境史: 『エコ革命』?」『九州歴史科学』32, pp.68 70
- 田北廣道, 2006, 「19世紀後半プロイセンにおける工業化と環境立法の整備: 住民運動活性化の引き金」『経済学研究』72 5/6, pp.19 63
- 田北廣道, 2008, 「ルール地方の化学工業と環境運動: 1875 77年イエガー染料会社を例として」『経済学研究』74 5, pp.47 91
- 田北廣道, 2009, 「ドイツ化学工業勃興期の環境闘争: 1864 1872年イエガー染料会社の場合」『経済学研究』75 4, pp.27 73
- 田北廣道, 2010, 「19世紀ドイツの工業化と環境闘争: 政策主体アプローチの可能性」『歴史科学』201, pp.1 14
- 田北廣道, 2010a, 「1872 75年イエガー染料会社と環境闘争: 鑑定書・証言録にみる闘争の諸相」『経済学研究』77 1, pp.71 119
- ド・シギール, C. (久松健一/ルソー麻衣子訳), 1999, 『人間とごみ: ごみをめぐる歴史と文化, ヨーロッパの経験に学ぶ』新評論
- ドロール, D./ワルテール, F. (桃木暁子/門脇仁訳), 2006, 『環境の歴史: ヨーロッパ, 原初から現代まで』みすず書房
- 穂鷹知美, 2004, 『都市と緑: 近代都市の緑化文化』山川出版社
- ポメラント, K.(杉原薫・西村雄志訳), 2003, 「比較経済史の再検討: 『東アジア型発展経路』の概念的, 歴史的, 政策的含意」『社会経済史学』68 6, pp.13 28
- ポンティング, C. (石弘之/京都大学環境史研究会訳), 1994, 『緑の世界史』(上)(下), 朝日選書503/

504

- マコーミック, J.(石弘之 / 山口祐司訳), 1998, 『地球環境運動全史』 岩波書店
- 水島 司, 2002, 「環境と土地所有」 社会経済史学会編 『社会経済史学の課題と展望 (社会経済史学会創立70周年記念)』 有斐閣, pp.89 104
- 水野祥子, 2006, 『イギリス帝国からみる環境史：インド支配と森林政策』 岩波書店
- 三保延子, 2010, 「産業革命期イングランドにおけるナイトソイルの環境経済史：英国農業調査会『農業にかんする一般調査報告書』にみる都市廃棄物のリサイクル」, 『社会経済史学』 76 2, pp.93 115
- 森本芳樹, 1989, 「ヨーロッパ中世における自然の領有」 柴田三千雄他編 『歴史における自然 (シリーズ, 世界史への問い1)』 岩波書店, pp.117 140
- 安国良一, 2003, 「別子銅山の開発と山林利用」 『社会経済史学』 68 6, pp.29 40
- 柳澤 悠, 2003, 「村落社会構造の変動と有力者主導型資源管理体制の崩壊：南インドにおける村落共同利用地の100年」 『社会経済史学』 68 6, pp.55 74
- リグレイ, E.A.(近藤正臣訳), 1991, 『エネルギーと産業革命：連続性・偶然・変化』 同文館
- ル・ロワ・ラデュリ, E.(稲垣文雄訳), 2000, 『気候の歴史』 藤原書店
- 脇村孝平, 2002, 「グローバル・ヒストリーと『環境』」 社会経済史学会編 『社会経済史学の課題と展望 (社会経済史学会創立70周年記念)』 有斐閣, pp.63 74
- 渡邊裕一, 2007, 「中近世ドイツ都市における森林政策：ニュルンベルクの帝国森林を例に」 『比較都市史研究』 26 2, pp.6 7

[九州大学大学院経済学研究院 教授]